

エコプロダクツ 2004 同時開催
未来を描くコミュニケーションプラットフォーム
～つながる・みつける・育つ～

<開催趣旨>

西条： 今日 J F S にとって先輩の Think the Earth さんと一緒にこのセミナーを企画させていただきました。Think the Earth さんはビジネスを通して社会貢献できる仕組みをつくって、そこに皆さんが参加していただくことによって、その中で自分と地球、人と人とのつながりを考えていくきっかけをお手伝いするような活動を日々なさっていらっしゃいます。J F S の方は日本の環境にいい取り組みを世界に情報発信するお手伝いをしてきていまして、日本と世界をつなぐということをメインに活動しています。私たちスタッフ同士、交流したり仕事を一緒にさせていただくことがあるんですけど、お互いの活動に共通点があるんじゃないかと思って今日の企画を考えました。共通点ありますよね。

本田： そうですね。まず一つは、ウェブ・コミュニティというのを活動の一つ、キーワードにしているということがあります。

西条： もう一つは、たくさんの皆さんが、場所を問わず、年代を問わず、いろいろな人が集まってコミュニケーションの場をつくるということですね。

本田： そのコミュニケーションの場づくりから、両団体とも、世界と日本の人たちに向けて発信をして受信をして、人と人のつながりを育てていけるように、日々思いを持ちながら活動しているというところが、共通点になりますね。

西条： 本田さんにとって、Think the Earth という場、コミュニケーションの場というのはどういう場でしょうか？

本田： まず、Think the Earth という活動に参加する前の、一ユーザー、一ファンとしてというところも鑑みてお話させていただくと、なるべく間口を広く、どの皆さんにとっても入って来やすいような雰囲気作りをこころがけていまして、実際に運営する側に入ってみますと、一人一人の経験や思いの一つ一つを大切にしながら、形にしていくことが可能な場、私にとってもそういう意味合いがある場として今は受け止めています。

西条： 自分らしくいられる、自分の思いが実現できる場という感じですね。私も活動していると思うのは、日本の中だけのつながりではなくて、それを世界に広げることによって世界中からたくさんのフィードバックが来たりして、こういうつながりを作っていく中で新しい社会に変えられるきっかけができるんじゃないかという可能性を感じるということがあります。

本田： 一人一人の力を尊重しながら、それが結集して大きな力になっていくというところを魅力に感じるとおっしゃってますよね。

西条： 今日はそういうコミュニケーションの新しいスタイルだとか可能性についてみなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

本田： では、今日のプログラムの方簡単にご紹介させていただきます。まず、今日ゲストスピーカーとして三方お迎えしています。NPO法人グリーンエネルギー青森の事務局長をされています三上亨さん、NPO法人樹木・環境ネットワーク協会の専務理事をされています澁澤寿一さん、CO-WORKSの代表でありコンセプターをされていて、この11月に立ち上がった「おびネット」の幹事もされている飯島ツトムさん、この三方のお話を聞いていただきます。事務局として、どういう思いで皆さんにお話をお願いしたかを簡単にお話させていただきます。まず、「グリーンエネルギー青森」の三上さんは、青森で市民風車事業を行っていらっしゃいます。風車自体は青森にあるんですが、その地元の方、青森の方に問わず、思いが共通している全国の方をつないだ地域といいますか、「空間にとられない地域づくり」というところで新しい活動をされている中でのお話を伺いたいと、お願いしました。次に「森の“聞き書き甲子園”」の渋澤さんには、「森の“聞き書き甲子園”」という、年代と世代と組織を超えたところで立ち上がっているプロジェクトの中で、何を見てこられたかということをお話いただく予定です。「おびネット」の飯島さんには、「おびネット」もウェブ・コミュニティの一つの新しい形なので、その空間というか、ウェブ・コミュニティというどうしてもバーチャルというイメージで語られることが多いのですが、空間とリアルということにとられず、人の集まる場をデザインしていらっしゃるということで、お話をお聞きしたいと思っています。

西条： 引き続きまして、私どものそれぞれの代表、上田と多田による2人で掛け合いも交えながら、リアルな事例を踏まえてのネット・コミュニティとしての可能性・価値、その中で工夫していることや悩んでいること、やってみたいと思っていることを伝えてもらいたいと思います。そして最後に発表者全員の5名のみなさんでトークセッションを予定しております。5時前くらいまでの長い時間になりますが、どうぞお付き合いのほどよろしく願いいたします。

『思いをつなぐ市民風車～遠くて近いまちづくり』

三上 亨（特定非営利活動法人 グリーンエネルギー青森 事務局長）

http://www.ge-aomori.or.jp/windmill/index_w.html

みなさん、こんにちは。ご紹介いただきました、「グリーンエネルギー青森」の事務局長をしております三上と申します。我々は青森県の鱒ヶ沢町というところに市民風車を建てました。市民風車は 1500KW の容量のもので、この風車は、年間約 370 万 KWh 発電をする風車で、家庭でいうと約 1100 世帯分の電気を賄うことができます。事業費は 3 億 8 千万円かかったわけですが、そのうちの半額が補助金で、残りは一口 10 万円の出資金を市民の方に呼びかけまして、1 億 7 千 820 万のお金が集まりました。一口 10 万円で約 800 名の方が出してくれました。これは地元の鱒ヶ沢町はもちろん、県内の方、それから全国の方から集めたものです。

風車や地元の様子を見ていただきたいんですけど、この風車は 2003 年の 2 月に運転開始をした風車なんですが、7 月にお誕生セレモニーということで、約 200 名の方が集まってくれました。これは鱒ヶ沢の町長さんで、挨拶している様子です。その時に風車の回りに花を植えようということで、キリンさんから花を 1 万苗くらい寄付していただいて植えました。この下の方が約 2 ヶ月後の様子なんですけれど、風車の周りを花で埋めたということです。市民風車の本体には名前を記名しました。この女性は、実はだんな様が亡くなって何年かたっている方なんですが、自分の名前と亡くなっただんな様の名前を風車に記名したいということで出資をされて、こういうふうに記念撮影をしたんです。これはいくつかの小学校が総合学習の一環で風車の見学に来ている様子です。後でお話する青森県産の枝豆をブランド化しようということで、枝豆も売ったりしています。この方がその枝豆の生産者で木村さんです。

今、少しだけ様子を見ていただいたんですが、後は皆さんのお手元にある資料で話を進めていきたいと思えます。我々がもともと風車を作った目的というのは、「市民参加による風車建設を通じ、自分たちのエネルギーは自分たちで選び創り出すという仕組みを実現させる、同時に地域社会を活性化させていく」、そういう目的でこの風車を建てました。

この風車というのが、今、お誕生セレモニーの様子など映しましたが、単なる物体ではなく、ある意味で心がつながるような、そういう象徴なわけですね。お誕生セレモニーを見に来た出資者の何人かの方が、「風車が輝いて見える」と言われるんです。私自身は風車は輝いて見えなかったんですが、東京から来たご夫婦などが、本当に輝いて見えるとおっしゃるんですね。その下に「あー、いだいだ」って書いてあります。この「いだいだ」というのは津軽弁なんですけど、ちょうど電車から風車が見えたときに、「あー、いだいだ」というのは、ある物体がそこにあったという言い方ではないんですね。「自分と心が通じて、あるものがそこにあるんだ」という感覚なんです。そういうふうを感じるということなんです。その下の「風車が元気に回っていると自分も元気が出る」と言っているのは地元の出資者の方で、保母さんなんですけど、毎朝風車の前を通るといって、それを見るととても元気になるといって、その下は「“わんず”はとってもかわいいですよ」とあります。これは実はわたしが言ったんですけど、いろいろなお客さんが来た時に「三上さん、風車見るとほんとにうれしそうにしてますね。」と言われると「ええ、

とってもかわいいんです。」と言ってしまふんですね。我々が何もしなくても市民風車の“わんず”は黙々と風を受けて回って、お金を稼いでくれて。我々はよく、遊び心をもって仕事をするという話もするんですけど、NPOというのはどこのNPOも収入が安定しないで苦労している訳ですが、我々はこの風車のお陰で幹となる事業といえましょうか、定期的に入る収入を持っているところが事業展開をする上で非常に助かっています。そういう意味も含めて、この風車を見ると非常にかわいく思えるということがあります。

先ほど写りました鱒ヶ沢の町長は、「NPOは世直し団体だ」というようなことを時々言うんです。非常に地域が閉塞感を持っている中で、鱒ヶ沢の町に風車が建ち、それを運営しているNPOと付き合い合うことで自分たちも何か変わる可能性を感じている、と言う意味で彼はこの言葉を使っていると思うんです。今言ったことが、我々が風車を建てて印象にのこっている言葉です。

次は「グリーンエネルギー青森」のミッション・マネージメントと書いてあるところです。我々「グリーンエネルギー青森」のミッションというのは、「循環型社会の実現」と「地域の自立」の2つを言っています。必ずしも「グリーンエネルギー青森」というのは風車を建てるのが目的のNPOではありません。我々としてはこの風車を1つの大きな軸としながら、地域を元気にしていくとか、日本の社会全体を変えて行きたいと思っているわけです。「みんなハッピーなマネージメント」ということでいるんな関係者、ステークホルダーが自発的に参加する、あるいはそこに参加をすることで満足をする、そういうシステムの提案をしようと言っています。

そのうちの 하나가、資料に書いてあります「鱒ヶ沢町マッチングファンド」という仕組みです。我々の出資者の方々に年一回配当を払っているんですが、その中から寄付をお願いしています。寄付をいただいた方々の合計額と同額を我々「グリーンエネルギー青森」が拠出しましょう。さらにその市民とNPOが出したお金と同額を町に出してくださいと、町に要請しています。今年の6月に寄付を呼びかけたところ、25万円の寄付が集まりました。それに対して我々NPOも25万円出しましょうとなり、町で50万を拠出するというので、合計100万のお金で町づくり基金を作るということを今進めています。これは来年度事業化することになりました。要は、個人の方が寄付をしたお金が4倍になって町を活性化するための基金になるということ、我々が提案して、今実施されようとしています。

それから「省エネルギービジョン」と書いていますが、これはNPO法人が省エネ・ビジョンを受託する例はほとんどないと思うんですが、今我々はこのビジョンを受託して、町、あるいは住民の方といっしょに、このビジョンの策定をすすめています。

3の市民風車ブランド創出事業について少しお話しします。この事業自体は3つの組織がかかわっています。我々「グリーンエネルギー青森」が全体の企画やコーディネートをし、「あつぷるぴゅあ」という企業組合が販売を担当し、生産は有限会社で「白神アグリサービス」というところが担当しています。事業の狙いとしては、「グリーンエネルギー青森」がミッションとして掲げる地域の自立を実現するためには、市民風車をきっかけに、鱒ヶ沢産の特産品をブランド化することが有効だと考えました。

この取り組みが成功すれば、一つは自立を目指す農家をサポートすることによって、結果的に

農業後継者を作る。実はよく農業後継者がいないという話をするんですが、なぜかと言うと農業だけでは食えないということがあるわけです。農家の方が本気で自立を考えていけば、その人たちをサポートすることによって、その人たちが継続的に農業で生活をしていけるようにしたいということです。もう一つはその裏返しで、今青森県でも非常に耕作放棄地が増えていまして、これをどう解消するかが大きな課題なんですね。今日本の食糧自給率は 40%を切るくらいなんです。これは青森県だけではなく、いろいろな地域で問題になっているわけですが、やはり消費者もそういうことを考えていく必要があるだろうということで、売れる農業を創りたいと、我々は考えています。3番目として、生産者と消費者の顔の見える関係をつくる、それはある意味でいっしょに農業をつくるということだと思っています。

実際に我々は、青森県産の枝豆を特産化するために「一坪オーナー」の事業をしたわけですが、約 160 名の方が 300 坪ちょっとのオーナーになってくれました。我々は消費者であっても農業に参加できるんだということを言いたいわけです。参加をする方法としてそのオーナーになる。なぜ農家が収入が増えていかないかについては、時間の関係上詳しい話はできませんが、今の農業生産物はほとんどが、農協などを通じて市場に出荷され、非常に安い値段でしか引き取ってもらえないということがあります。農家は、これまで行政の考え方もあって、作ることに専念してきたため、販売などには興味をもたないで生活してきているわけです。最近それが米などでもどんどん自由化され、急に「あなたたちも売ることを考えなければならない」と言っても簡単にそれを実行できる人はいないわけです。我々消費者の側から考えた時に、どういうことが言えるかという、我々がそういう状態で、生産者の方が一生懸命作っても本当に安い値段でしか売れないという状態を放置しておく、農業の後継者はいなくなる、耕作放棄地はどんどん増えるということで、非常にマイナスなわけです。消費者も安全でおいしいものを食べたい、生産者の方も安全でおいしいものを食べさせたいと思っている、それを仕組みとして創っていく必要があると我々は思っているんです。それを我々は競争マーケットに対抗しうる「共感マーケット」というものを創出しようということを出資者の方を中心に呼びかけているわけです。

「グリーンエネルギー青森」に出資者、会員の方が約 900 名いるんですが、この方たちに呼びかけることによって、「一坪オーナー」の制度もある程度機能してきている。さらに会員、出資者だけでなく、その周りの方々に今市民風車ブランドが広がりがつあります。今日は「ネット・コミュニティ」ということが 1つのテーマになっていますが、今のところ強いつながりを持っている 900 名の方を基盤に市民風車ブランドの取り組みをすすめているわけですが、それをさらに拡大するために、今後の課題としてネット等をどう活用してそういう人たちの共感を集めていくのか、そこを次の次の場面でお話させていただきます。

最後にひとつだけ宣伝させていただきたいんですが、このパンフレットがお手元にあると思いますが、実は我々の風車は全国で 2 番目に建った風車なんです、今全国で 4 番目と 5 番目ということで北海道の石狩市に風車を建設する計画がありまして、4 億 7 千万出資を集めようとして取り組んでいます。約半分もう申し込みが集まっているんですが、ご興味ある方はこちらのほうで資料請求をしていただければと思います。

それでは報告を終わります。ありがとうございました。

『森の“聞き書き甲子園” 受けついできた人と受けついでいく人の交歓』

渋澤寿一（特定非営利活動法人 樹木・環境ネットワーク 専務理事）

<http://foxfire-japan.com/index.html>

渋澤です。どうもこんにちは。資料がお手元に3部あると思います。1部はカラーコピーの「森の“聞き書き甲子園”」、それとあと2部、今年の募集チラシと私どもの活動が本になったチラシが入っております。

「森の“聞き書き甲子園”」というのは、全国の100人の高校生が100人の森の名手・名人、要するに森で暮らしている、実生活をしている人たちのところに聞き書きに行くという作業です。聞き書きに行くということは取材に行くことではないわけで、聞き書きという行為は、相手のしゃべったことしか文字に残せないんですよ。取材というのは、「このおじいさんが、こういうふうにしらべたことしか文字に残せないので、聞き書きという行為は、相手のしゃべったこと、つまり相手の名前を書く文章なんです。ですから、そのおじいさんがしゃべっている言葉の中、それをどうやって糊とはさみで切り貼りをしながら、どういうイメージのことをどう伝えたいのか、そしてその中で彼がしゃべった裏側に「楽しいんだよ」ということをどうやって表せるのかということ、高校生たちがずっと考えながら、それをつないでひとつの文章にしていくという作業なんです。ちょうどここに Think the Earth の久田さんたちが今年の募集チラシを作ってくれたんですね。《「きく」ことで、（何）がつながる。》まさにこの「何がつながる」ということをみんなで考えていこうというプロジェクトになっております。

プロジェクトの枠組みは、林野庁とそれから文部科学省という国の行政機関2つと、私どもの樹木・環境ネットワーク協会というNPO、それから社団法人の国土緑化推進機構という「緑の募金」を主にやられているところが共同でやっている事業です。私もNPOでいろいろなファクターの方々と一緒に仕事をさせていただいていますが、本当に共同でみんな汗をかいているなというように初めての事業です。それがなんでそうなったのかというあたりを、今日は「コミュニケーション」という切り口でみなさまにご紹介できたらと思います。

高校生たち100名というのは、各県からひとりずつの推薦と、それから公募で100名あがってまいります。森の名手・名人たちというのは、今、森に暮らしてきた人たちという話をしましたが、よく日本は「森の国」だという話をされます。たしかに森林面積は非常に大きいんですが、私どもが森を歩いておりましたも、つくづく本当にそうだなと思うんです。なぜかといいますと、たとえば、これはいい例ではないかもしれませんが、新潟県で大変な震災がございました。山古志村とか周辺の山間地の非常に悲惨な映像を多分たくさんご覧になっていらっしゃると思います。一方で新潟市とか長岡市とか大都市があります。

そもそもどういふところで日本人が生活してきたかといいますと、新潟市の歴史と山古志村の歴史を比べますと、はるかに山古志村の歴史のほうが長いんです。それはなぜかといいますと、日本人というのは基本的に衣食住のほとんど全てを森から得てきた国民なんです。山菜、きの

こ、栗、栃などの澱粉という食料だけではなくて、自分たちの着るものも「からむし」というミヤマラクサミみたいな草の繊維、あるいはシナノキの繊維をずっと織って、生活の中で実際は普通の庶民は使っておりまして、それから自分たちの建てる家、あるいは屋根をふく萱とか、全部森から持ってきた。つまり、畑と田んぼでできるわずかなもの以外、ほとんど全ての生活は森に負ってきた国民なんです。

ですから基本的に森の近くで最初の集落が生まれて、それがだんだんだんだん川を下ってきて、そして今は大都市になっております。私どもはもう森に生活を負わなくてもよくなった。私どものへその緒は、実は海外から入ってくる 40%以上の食糧、あるいは海外から入ってくる 80%近いエネルギーによって、私どもの今ここにいる環境が維持されているわけでございます。

今日は、ひとつはコミュニケーションということと、両方の活動のみなさんともサステナビリティということテーマにあげていらっしゃいますから、その意味で、サステナビリティということ言いますと、日本というのは旧石器、縄文、弥生とずっと続いて基本には森と人間が共存をしながらサステナビリティを維持してきた国ということが言えると思うんです。その森と人間が共存してサステナビリティを維持してきた国が、今は大都市周辺でその縁は切れてしまっています。

実は、森の名手・名人というのは急に森の中に名手・名人が生まれたわけではなくて、森の自然を利用しながらどうやって生活をできるか、山菜をどうやってたくさん採れるか、あるいは木地師でどうやって木のお椀を作っていけるか、あるいはマタギでどうやって狩猟と農耕をしながら生活を維持できるか、そういうような名手・名人なわけです。つまり森と話をしながら、コミュニケーションを自然ととりながら生活をやってきた。ある意味では日本が3万年、あるいはそれ以前から連なってきた持続可能な自然との共存の形態の最後の具現者です。

最後の具現者というのはなぜかと申しますと、先ほどから言っております私どもの生活は、もう日本の森に依存しているのではなくて、海外の資源に依存するようになってしまったからです。この最後の具現者、これはもうほとんどが70、80のお年寄りです。それを何とか次の世代につなごうということ、高校生たちにこれをつないでもらおうというのが実はこのプロジェクトの趣旨でございました。ですから、ほんとにここで切れてしまう、日本人が持っている日本バリューというものを次の世代にどうつなげるかということで進めてきたんでございますが、実はそのあと全く違う展開になってまいりました。

高校生たちは毎年100人ずつ、おじいちゃん、おばあちゃんのところへ話を聞きに行きます。100人がレポートをまとめていきます。これは大変な作業です。聞き書きですから、要するにテープを録って、テープを書き起こして、そしてテープを書き起こしたものを10分の1ぐらいにそぎ落として、先ほど言った「おじいちゃんがこう語った、おじいちゃんがこういう人生を歩んできた、こういうような技を持ってきた」ということを作っていく作業なわけです。

これは、高校生たちはみんな2年とか3年とか(1年の子もいますが)受験勉強とか学校の勉強、学校のカリキュラムとは全然違う授業を、どんなに文部科学省、林野庁が関わっているといっても、学生たちにとっては全然違う授業です。

100人が本当にこれをやれるのかな。テープ起こしをしたものを、それをまた名人たちと話を

して方言がわからないとか何を言っているかわからないというところを聞きなおして、またそれを切り貼りしてまたひとつの文章にして、またそれを投げかけてということをやるとやらなきゃいけない。本当に 100 本が 100 本出てくるのかなと思いました。

1 年目、100 本がきれいに出てまいりました。2 年目、また 100 本が出てきたんです。私もそこでなんでかと思ったんです。カリキュラムにないものがなんで全員が 100 本出てくるのかと。そこで私どもが初めて気がついたことがあるんです。

コミュニケーションというのは、今日もそうですが、私がこうやって言葉を投げかけること、要するに私が何を考えていてこうだということ、ネットにしても会話にしても、しゃべることがコミュニケーションだと私どもはずっと思ってきた。多分高校生たちもそう思ってきたと思うんです。ところが、自分の言葉が通じない人たちにアポイントをとって、言葉がよくわからない、どうやって生活してきたかもわからない人たちの生活の聞き書きを起こしていくときには、書いた文字をどうやって切りつないでも意味がわからないんです。つまり文字と文字のやり取りをしている間は、彼らはまったくその名人とコミュニケーションがとれないわけです。

ところが、おじいちゃんと話に来て、ある 1 枚の木の葉があって、それがきれいだとおじいちゃんが言った。自分もきれいだと思った。あるいは夕日を見ておじいちゃんがきれいだと言った。山がきれいだと言った。自分も本当にきれいだと思った。あるいは、おじいちゃんがあるところで笑った。自分が笑った。そして一緒にそこで初めて言葉が通じた。つまり、ずっと言葉のやり取りをしているんですが、その行間を埋めていくお互いの信頼関係みたいなもの、そういうものができて初めてコミュニケーションができる。つまり、今までディベートやなんかで発言することがコミュニケーションだと思っていた人間が、「聞く」ということがコミュニケーションの一つの重要なファクターだと気づいていきます。そこで、「聞く」ということがそう解った瞬間に、それはおじいちゃんとの信頼関係になるんですね。

ですから彼らは与えられた 100 本の、要するに 100 人の子が聞き書きの 1 本ずつをまとめていくということが、これは自分の作業ではなくて、実は聞いている相手、コミュニケーションをとっている相手の人との共同作業、つまり自分たちの名人が 100 人のうち一番すばらしい名人だと、みんな思うようになるんです。このおじいちゃんを裏切れないと思う心が、今度は初めてその聞き書きの製品として 100 本が全員出てくる。このとき、その子どもたちが変わっていくんです。

今の高校生は社会との接点なんて、ほとんどないんです。要するにバイト先のコンビニの店長と学校の先生だけですよね、大人の世界って。その高校生たちが、普通の世代を飛び越えておじいちゃんと心の信頼関係ができたと思った瞬間、彼らは社会の中での自分の位置づけとか自分のアイデンティティをはっきりと感ずることが出来ます。

今日は何人かそのOBたちが来ておりますので、あとで話を聞いていただければと思うんですが、そういうことによって、本当に子どもたちが、生きるということ、学校で教わったこと以外のことで自分が認められるということ、学校が与えているという価値以外の価値が世の中には存在するんだと、それを持つことで本当に安心ができるんだ。

おじいちゃんたちはなにも学歴があるわけでもないです。大変な大学を出ているわけでもない。

だけど自然の中で自然とコミュニケーションがとれる人たちですから、全然自分の人生を不安に思っていないんです。高齢化だとかあるいは少子化だって言っているのは、都会の人たちが心配しているだけで、彼らは自分で家も建てることができる、自分で自分の食べものは全部作ることができる、おばあちゃんたちは自分の着るものは自分で織ることができる。何の心配もしていない。そういう人生があるということ、そしてそのおじいちゃんたちを通して向こう側の自然があるということで、ものすごく子どもたちも安心をします。そして自分たちが変わっていきます。自分たちのアイデンティティがそこで出てくる。そこで初めてコミュニケーションがとれているという状態なんです。それを見ると、周りの大人が本当に変わるんです。

私どもも今まで最初は、本当におじいちゃんたちのアーカイブとして、持続可能な社会のモデルとして、知恵として残していかなきゃいけないと思ってこの事業を進めていたのが、むしろ高校生たちが世代をつないだコミュニケーションがとれるということ、何とか応援をしていきたいと思って、林野庁の職員も文部科学省の職員もNPOの人間も財団の人間も、みんなが本気になって本当に手弁当になって、スポンサーを探して子どもたちが何とかできるように枠組みを作って、そして今は卒業したOB・OGたちが事業全体の主たる運営をするように、要するに高校生たちの次の世代のケアですとか、あるいは教育をするような形の人間関係が生まれてきています。

ほんとにひとつの「森の“聞き書き甲子園”」というプラットフォームの中で、私どもが言葉の投げ取り以外のその向こう側にある、俗な言葉なのかもしれませんが、やはり「愛」だとか「信頼」という基本的にコミュニケーションの一番のベースの部分、その部分に触れられるということが世代間を通していちばん感動を与えるんだということを実感させられております。そのへんのことも、またあとでトークのときにお話ができればと思っておりますので、次の方に引き継ぎたいと思います。

どうもありがとうございました。

『夢を実現するためのシステム “おびネット”』

飯島ツトム (CO-WORKS 代表 コンセプター、おびネット幹事)

<http://www.opinet.jp/>

皆さん、こんにちは。飯島ツトムです。よろしくお願ひします。きょうは、皆さんの夢を実現化するという支援システムのお話をします。おびネットと言ひます。「おび」が平仮名、「ネット」が片仮名です。今日また、おうちに帰られて見ていただきたいと思ひますが、今日はコミュニティとコミュニケーションにまつわるお話をしていきまひす。ちょっと整理するために、コミュニティの話の前振りとしてさせていただきます。戦後のコミュニティという話をします。

実は戦後、私たちが荒廃した日本をもう一度戦後復興という形で立ち上げるために、私たちの新しい社会をつくるために、一つは新しい企業というコミュニティをつくりまひました。それから、2番目に学校というコミュニティをつくりまひました。それから、皆さんは自覚がないかもしれまひせんが、家庭というコミュニティを、この3つのコミュニティで、日本を復興してきたわけです。

ところが、この3つのコミュニティでは、ちょっと不足が出てきたというのが、昨今のNPO、NGO、それからこういった新しいボランタリーないろんな動きが出てきたというふうに思ひまひす。先ほど、洪澤さんがお話があつた「森の“聞き書き甲子園”」というの、もともとは、森の知識をためていくアーカイブだと言われたものが、先ほどのご説明にもありまひましたとおり、むしろ私たちの聞く力を促進していくという、新しい機能を持ち始めたということです。これは、どういふことなのかなというのを、新しいトレンドとして、お話をしたいと思ひまひす。

どうしてこんなことになってきたのか？ つまり私たちの目指しているもの、また望んでいるものというの、知識をたくさん持つことでも、大きなお金を持つことでもないというふうに皆さんが感じ始めたんだと思ひまひす。私たちはもっといきいきとした、生命の潮流へもう一度戻っていきたいというよふな、潜在的な私たちの情動が起こってきているのではないかと、これが一番の大きな変化だと思ひまひす。

今、私は環境 goo 大賞というところのプレゼンテーションをして、ここへちょっと駆け足で戻ってきました。今年もホームページの世界でも、実は大きな動きがあつて、特に個人の力、個人のサイトが優秀賞にかなり選ばれるよふになりました。これは、今度はコミュニケーションツールの話に少し移りまひすけれども、今年にはウエブログというインターネットのホームページをつくるよりも、より簡単な、自分の日記のみを書いていくウエブログというのをを使いながら、自分のホームページを立ち上げる人たちが出てきたということです。これはよりホームページの構築よりも、簡便であり、即時性があるということで、ことしはその即効性、即時性を生かしたウエブログが個人の中では目立っておりまひす。なおかつ、企業のウェブサイトよりも非常に生き生きしている。つまり先ほどの高校生たちが、生き生きとしているよふに、何かに目覚めて書いている人がやはり社会に大きな影響を与え始めたというふなことです。

それで、コミュニケーションツールの変遷からいきますと、インターネットという大ざっぱな世界があります。私たちはホームページという形で、NGOやNPO、もちろんここには、きょうの主催である、Think the Earth や JFS はホームページとかインターネットを使って、世界に発信したり、受信したり、活動をしています。それから、先ほどちょっと申し上げた、ブログ、それからメールなどいろいろ出てきました。ホームページ、メール、ブログに続く第4の大きなメディアとして、実は「おびネット」というのを皆さんにお披露目をしたいと思います。

これは、グランドオープンは実は昨日だったんです。昨日で、ある程度の基本機能ができましたということです。簡単に今日は、時間がないので割愛しながらお話をしたいと思います。コンセプトは、「Feel And Think」というのをコミュニケーションしています。先ほど洪澤さんのお話があったとおり、聞き書く、人に聞くということは、感じる自分があってそれから、よく考えてみよう。「よく考えよう」という、アフラック生命のコマーシャルがありましたけれども、実はアフラック生命のオオタケさんも実はこの発起人の一人になっていただいています。つまり、Feelということを中心にしようというメディアです。ですから、どちらかと言うと、実は聞き書き型のネットだということです。

そしてちょっと概念だけお話をします。上のほうにアイランドというのがあります。これが一つ一つのコミュニティを指しています。ここに一つ一つのアイランド、フジテレビキャスターの黒岩さん、それから、ちょっと私が関係した、きのころというドングリ、それから、もう一つ、見えない学校フィルムコミュニティー。この一つ一つのアイランドが、皆さんの目的、夢を実現化する島なんですね。今まではある団体をつくったと。団体をつくって、何か組織をつくって、実行委員会があって、理事会があってという構造だったんですが、みんながこのアイランドを育てていきたいと思いますということです。ですから、ある意味で、今までのピラミッド型の構築ではなくて、アイランドをみんなが育てていきたいと思いますという考え方です。

アイランドという概念がありますけれども、ここにアイコンがいくつか出ていますが、アイコンの形が一つだけ変わっているのがここにあります。実は訪問者が多くなると、アイランドのイラストがより小さい孤島から、少し大きくなっていくという、そういうふうな仕掛けをしています。ですから、パッと見たときに、「ああ、ここは訪問者がもう多いな」と。これは本当は9月から立ち上げて、今多分1万8,000人ぐらい訪れています。わずか、2、3カ月でそのぐらいの方がこの島に訪問するという形です。

ちょっとコンセプト的な話を先にさせていただきますと、アイランドという概念が出たのは、言葉で言うと、皆さんの暮らし、コミュニティというのは多様性があるということで、多様性の海の中にこういう一つ一つのアイランドがあるんだよというふうな見せ方をしたいということがあります。

では、ツールの使い方を説明したいと思いますので、もう1回ホームへ戻ってください。

これがおびピネットという中です。左がログインです。ここにIDとパスワードを入れると、おびネットの中に入れます。名前とパスワードを入れるとログインします。これでおびネットの中へ入ったわけです。皆さん、お帰りになったら、自由にこのホームページへ行くことができます

す。いま、ヒジカズコさんという名前が入りました。ヒジカズコさんという名刺があります。かわいい猫がシンボルになっています。今操作していただいているヒジカズコさんの名刺です。「名刺設定」と「名刺を送る」とありますけれども、ここに登録していただくと、名刺を送ることができます。自分が目指している人に名刺を送るとクリックすると、自分からの名刺が届くという一つの機能があります。

そういった形でのソーシャルコミュニティネットワークの機能も兼ね備えていますけれども、実は眼目がここに書いてありますとおり、「フォト日記体験」というのがあります。これもまた、お帰りになったらちょっとやっていただきたいと思います。

「フォト日記」というのは、この機能の大変なところで、簡単に言いますと、携帯メールで、写真を撮って、その場でコメントを書いて、メッセージを書いて、送信とすると、ウェブに上がってしまうようなことです。特に、フィールドワークをやっている森の聞き書きの諸君は、FORMAでももちろん結構ですけれども、森に入ってフィールドワークをしますと、ここでこんな木の実を見つけました、こんな樹木を見つけました、こんな生命を見つけましたと、同時にやりながら、一遍にアップしてしまうという感じになってきます。フォト日記見られます。「きのころ」でいいですね。じゃあ、はい、「きのころ」です。

たまたま実験的ですけど、実はこれを立ち上げたのはわずか1カ月もしていません。エコプロダクトのために、このおびネットを使って出展のブースをつくったということです。担当がガクさんという方ですけども、ここに時間が入っています。これは、即時アップをしています。今、このエコプロの会場に行くと、このコーナーがインフォメーションコーナーにあるんです。

これが一番最近の時間です。9日の17時45分の情報が上がっています。これは普通のカメラですけども、この場合は普通のカメラで撮って、コンピューターに入れ込んで、そのままメール等でアップすると、すぐ出てきてしまいます。これはフィールドワーク用に使えるということです。それから皆さんの日々のNPO、NGO活動のときに、自分が感じたことをすぐ撮って、アップできるということです。これもおびネット上の大事な機能の一つです。

では、あとは、幾つかの機能だけを紹介して、最初のプレゼンテーションは閉じたいと思います。「きのころ」の最初へいってみましょうか。このアイランドに帰ると、フォト日記のほかに、「アンケート」という機能があります。これは皆さんが聞きたいことを、アンケートできます。例えばどんなものが好きですかというアンケートをしたとします。

それから、アイランド以外に会員になれます。会員というのは、入会というこのアイランドに寄りますと、自分のボードを持つことができます。「チャレプロ・ネット」はほかのアイランドですけども、ここで言うと、普通「みんなで語りましょう」というのは、ボードです。ここに皆さんからの投稿の件数がずっと出ています。

これが今の人たちの一人ひとりの、アイランドの住人と言っていますが、コミュニティに参加している人たちの意見です。「みんなで語りましょう」はここに出ていますから、夢や希望を語りましょうということで、谷口さんという方がアイランドのオーナーで、若者たち、つまり高校生も含めて、外へ出て行っているいろいろなプログラムに参加しようというプロジェクトです。ここ

はもちろん他のアイランドからメッセージが来たり、これを見ている人たちということですが、高校生たちとの会話がここへずっと上がってきます。

一言でちょっと分かりにくいと言えかもしれませんが、各々が自分たちの夢を育てたいアイランドがあると。そのアイランドに対して、一つはメールの機能と、フォト日記という機能、それから、この施設へ入っている人たちが、一人ひとりが自分のページが持てるということです。My ボードと言います。それから、自分が聞きたいことを世の中に聞きたいということをもアンケート、つまり個人が、世の中に対してアンケートを行うことができる。これは、棒グラフで数字が出て、三択にすると、三択の中でリアルタイムでそのパーセンテージが分かるということです。

100 万人の参加者を私たちは望んでいます。つまり、100 万人が即時性でアンケートに答えられる世界は、一つ一つ、私は何を考えて、今何を感じているかということを実リアルタイムでコミュニケーションできるツールになってくるということです。

少なくともアンケートを出すというのは、どういうことかということ、人にどうですかと聞くことではなくて、先ほど言った聞き書きと同じで、質問自体が意味をなしてくるということです。例えば皆さんは率直に聞きたい、素朴に聞きたいということを一言アンケートを出していただきます。アンケートを出していただくと、右側にボタンが出ます。ボタンをクリックすれば、自分の表文が入ってきて、全体のパーセンテージ、例えば 100 人の方がこのコミュニティに参加しているとすると、100 人の中の何パーセントが A の意見、B の意見、C の意見ということが一目瞭然に見えるということです。そういったアンケートの機能があります。アンケートはアイランド全体でアンケートが出せるということと、一人一人であるこのアイランドの住人がアンケートを出せるという構造になっています。

時間がきましたので、私のプレゼンテーションを終わらせていただきますけれども、この新しいツールを使って新しいプロジェクトがかなり容易にできるというふうになってきています。先ほど申し上げました「きのころ」というプロジェクトでは、わずか 2 カ月の間に約 50 人ぐらいの方々が参加をして、いろんな専門家の方が参加をして、一つのプロジェクトを完成させたというプロセスがあります。ちょっと分かりにくくて、大変申し訳ないんですが、おうちに帰られましたら、一度おびネットというのを見ていただいて、活発に行われているそれぞれのアイランドの会話を見ていただきたいと思います。

ありがとうございます。

『コミュニケーション・プラットフォームとしてのITの使い方』

Think the Earth プロジェクト 上田壮一 <http://www.thinktheearth.net/jp/>
ジャパン・フォー・サステナビリティ 多田博之 <http://www.japanfs.org/>

多田 皆様、こんにちは。去年ここでJFSのセミナーをやりました。今年もぜひ何かやりた
いなと思っていたところ、Think the Earth さんのほうから、今日お三方に登場していただいた
お仲間のほうからこういうテーマでぜひやろうというご提案をいただいて、今日の日を迎えた
ということです。

上田さんと私のセッションは30分しか時間がないので、お互いのサイトにコメントをしながら、
今一部でお話くださったお三方に対するコメントもして、それからこのテーマに出ています、
今までやってきて、上田さんのところも私のところも非常にまだ若いNGOなんですけれど
も、短い期間でいろいろやって悩んでいることを皆さんと少しシェアして、この第三部のみんな
で最後のトークセッションのところにつないでいきたいと、そんな流れをつくりたいと考えてい
ます。よろしくお祈いします。上田さん、じゃ最初にご挨拶をどうぞ。

上田 こんにちは、上田です。今日はみなさんお集まりいただきましてありがとうございました。
前のお三方のお話は僕も非常に興味深くうかがわせていただきました。今日は事前にいろいろ
アンケートでお伺いしたところ、ネットコミュニティ、ITを使ってどうやってコミュニティ
を作っていけばいいのかとか、そういうところでご関心のある方が多いという風に思っておりま
す。それはですね、正解は全然なくて、僕らも日々試行錯誤しながらやっています。今日これか
ら二人で話すことは、どんなことに苦労しているのか、まだぜんぜん出来ていないよとか、あ
るいはやってみただけできていないこととか、そんなことを聞いていただきながらヒントにして
いただければと思います。30分間よろしくお祈いします。

多田 上田さん、ありがとうございます。今3人のお話を聞かせていただいて、三上さんは風
車をひとつのコアにしている、渋澤さんは森ですよ、飯島さんは固い言葉で言うと、支援、こ
こでは支援システムという言葉が書いてあって、こういう表層言語で言っちゃうと3つは全然違
った世界の話に見えるんですけども、今日のセミナーのキーワードで「つながる、みつける、
育つ」をあげているんですが、そのキーワードでいうと、3人の話っているのは非常にその親和
性が高くって同じような話がある意味ではされているような気がして、聞いていました。

三上さんの話で、「ああ、いーだーだー」みたいな話ですとか、「わんず」がめんこいなとか、共
感マーケットっていう話があったんですけど、なぜそれだけ風車がかわいいかっていうとやはり、
単にビルディングとしてある風車っていうよりも、その思いがあつた風車を作っているわけですよ
ね。私も実はご縁があつて10月に一度見せていただいたんですけども、私はごめんなさい、出資
していないんですけども、出資していない者が見てもめんこいなですよ、その風車って。や
っぱりそれは見ると、その風車っていうものに本当に思いが寄せられていて、思いが風景を作
っているなって僕は風車を見てすごく思いました。

それから森の話を渋澤さんからうかがっていてですね、そういう場をデザインすることで世代がつながっていくということと、それから「みつける」というキーワードが入っていますけれども、若い高校生たちはそういう営みを通して、結局僕は自分を発見するんだろうなと。自己発見の場、自分を見つける場が“森の聞き書き”というプロジェクトかなと思って聞かせていただきました。

それから飯島さんのお話を最後に伺いましたが、「育つ」ということでいうと、個人のエンパワーメントのお話をされていましたが、やっぱり自分が育つためには、仲間を育てる、人を育てることでやはり自分も育っていくのかなと、ちょっとキーワードに照らし合わせていうと、僕はお三方の話を聞いて最初にそんな印象を持ちました。上田さん、どうですか？

上田　そうですね、僕はいろいろ皆さんの話を聞いていて、やっぱり皆さんそれぞれがすごくわかりやすいビジョンを持っていて、ビジョンがあると多分いろんなアイデアが生まれていると思うんですね。アイデアが生まれると今度はそれを実現したくなると思うんですね、実現したくなるときに、コミュニケーションがものすごく活発に行われているわけですね。一人の人間だけでなく、いろんな人が関わってくる、その関わっていくエネルギーがそのままどんどん外に広がって行っている。それはですね、多分ネットを使ったりとかですね、ネットを使うときの大きい特徴になったりとか、そういうことが起きていくんじゃないかと思います。個々の話をしていくと、多田さんがお話していただいたように共感できるんですけども、そこをお三方とも非常に感じました。

多田　お互いを紹介するのは非常に照れくさくて、上田さんとやりにくいねっていう話をしていたんですが、Think the Earthさんのウェブを紹介します。ちなみにわれわれJFSは2002年に立ち上げたんですけども、そのときもすでにThink the Earthさんもこのサイトは立ち上がっていて、先輩NPOということで、僕らが活動する上でどんなところに配慮したらいいですか、と当時は上田さんのところにいるいろいろご相談に行ってお知恵を拝借したのを思い出していました。

これはトップのページで、Think the Earthプロジェクトということで、こういう画面から流れています。「人と世界が、つながりあう社会をデザインする」という。プロジェクトコンセプトみたいなものがここに最初に入っています。コンセプトというところでこういうことが書いてあって、ここでおっしゃっているのは、ビジネスを通して社会に貢献する仕組みを提供するんだということで、ある種のビジネスモデルを作るっていう、謙虚におっしゃってますけれども、結構大きな野望をおっしゃっていて、繋げるものっていうものはビジネスとソサエティですね。そこを繋げる場をつくりますよっていうことをおっしゃっています。ここに絵があって、これが今のコンセプトを絵として紹介したもので、ある種のビジネスモデルをここで出されているのかなという感じがします。僕は正直言ってCSRという言葉はあまり好きじゃないのですが、ある種のCSR的なものの先取りを既にこの時点でされているのかなと思って見せていただきました。

それからここは理事の方だとか、ファウンダーだとか、どういう人がどういう思いでこれを立ち上げたかという、要はコンセプトの上位概念のところからだんだんブレイクダウンして細かい核論に入っていくという形にしています。本当は司会のスタッフは両団体の活動の親和性みたいな

ことも触れていましたけれど、Think the Earth さんはこういうプロジェクト的なNPO活動と、いわゆるプロフィットオーガニゼーションですね、実際に物販をされたり、スペースポートという会社を表裏一体で回してらして、そういうPOとNPOを表裏一体で回されています。われわれも実はJFSというNPOと、エコ・ネットワークスという会社がありまして、それを表裏一体で回して、経営資源をなんとかそれで確保しているという形で、その辺のモデルも似ているかなと思いました。この辺はその中のNPOの活動をずっと紹介された後に、こちらは事業活動ということでビジネスベースの活動を紹介されています。

ここで、地球ニュースっていう形でグローバルに、今どういうことが世界で起きているかが、いろんなレポーターから紹介されているんですね。上田さんに聞いてみたいんですけど、ここで見るとタンザニアとか、ペルーとかイギリスとか、ずいぶんいろんなテーマで環境といってもかなりバラエティあるんですが、これはどういう仕組みで情報を集めていらっしゃるんですか？

上田 地球ニュースのリポーターという人が全世界にいまして、いましてと言っても僕らが派遣しているわけではなくて、現地で、例えば留学生だったりあるいは働いていらっしゃる方、最近だにご夫婦で世界を旅しながらレポートされている方とかですね、そういう方たちとネットワークでつながりながら、各地で聞いた、いわゆる新聞・雑誌のマスメディアでは玉石混合でいろんなニュースが出ているんですが、ここではあくまでも地球全体の、日本人だけではなくどの人が読んでも興味を惹かれるようなニュースを集めているんですね。それぞれが出すペースは一ヶ月に2,3本だと思いますが、リポーターが増えてくると集まるニュースも増えていくという仕組みを作っています。

多田 自然発生的にボランティアベースでネットワークされているという。

上田 そうですね、多少のお礼はしているんですが、基本的にはやりたいという方にやっていただいています。

多田 ありがとうございます。こういうグローバルなニュースレターが配信されていると。ここから先はいくつかのプロジェクトがあって、ブースで物販もされているので買われた方もいらっしゃると思うんですが、最初は「地球時計」ですよね。これは Think the Earth さんのシンボリックな商品かと思います。それから出版ということで、「100年の愚行」、これもかなり有名な著作なので、手に取られた方も多いと思います。こういうプロジェクトベースのものがずっと流れていますね。SHOP ということで物販去れています。ちょっと上田さんにもう一回質問ですが、プロジェクトはかなりまたそれぞれ出版とか、時計とか、水のこういうボトルとか、この辺はかなり多様性があると思うんですが、そういうプロジェクト同士の関連性だとか、ウェブみたいなコミュニケーションツールとの関係はどういうふうにデザインされているんですか？

上田 プロジェクトは、もちろんわれわれが企画をして持ちかけて始まるプロジェクトもあれば、最近ありがたいことに、プロジェクトが持ち込まれてそこからスタートすることがずいぶん増えてきました。そういう意味では個々との関係性によって、プロジェクトのスキームも違っ

てきますし、進め方も違うんですよ。それにひとつひとつ対応しながらやっていくというのが面白さでもあるんです。毎回一工夫二工夫違う。あるシステムを作ってその中で全部やっていくという形ではなくて、出会いの中でそのときそのときのやり方を考えるというやり方をしています。

やっぱりウェブを使うことの良さってというのは、特にこういう商品を作ったりする場合に、往々にして例えば出版社もメーカーもそうだと思うんですが、ものをつくってお店に流してそこで売るとそこで終わっちゃうことが多い。そこでおしまいにしようと。むしろその先コミュニケーションはしたくないと。だいたいクレームが来るのでコミュニケーションしなくちゃいけなくなると思うんですけれども。そうではなくて、商品を手にとった瞬間にわれわれとの関係が始まるわけですね。これはプロジェクトなので、ただ本を読んで「ああ面白かったなあ」で終わるのではなくて、できればウェブサイトアクセスしてもらえると、そこにまたその先にアクセスできる余地が残してあるんですよ。常にそうなんですけど、私たちのプロジェクトには余地が残っていて、その余地の部分をウェブに置いてあると。そうするとそこでまたコミュニケーションができる。あるいはそこからいろんな感想文が届いたりとかですね、そういうことができるというような考え方です。

多田 大変勉強になります。プロダクトという形で一回パッケージ化はするんだけど、普通それで終わっちゃうものが、それが逆に基点になってまた物語みたいなものが紡がれて行く。その仕掛けとしてウェブがあると。

上田 ひとつのプロジェクトがぐるっと回るとまた次のプロジェクトがそこで生まれるという可能性があるじゃないですか。その可能性を開いておくという感じですね。

多田 非常に面白いですね。こういうプロダクトがあってそれがショップという形で売られていて。それからこれはリソース集という形で、これは外部の方も入っているし、上田さんのところのスタッフの方も何人かお見受けしますが、そういう方々が例えば戦争について考えるということで、こういう書籍を読んだらいいんじゃないかとか、ここでいうリソースというのは情報のリソースですよ、こういうところにアクセスすればより深くものを考えるということで、そういうものをシェアするページを作られているということで。こういう時計とか個別のプロジェクトのページがあるということで。時間がないのもっと深掘りをしたいんですが、スナップショット的なご紹介しかできなくて、皆さんもの足りないかもしれませんが、ぜひ帰られてから深掘りをされてください。では、私の紹介はこれくらいにして。

上田 では、僕のほうからJFSさんのホームページとか取り組みのご紹介をしたいと思います。ホームページはまず最初にこういう、曼荼羅をイメージしたんですか？

多田 はい、しました（笑）

上田 真ん中に、先ほどの飯島さんがデザインされた水ひきをモチーフしたロゴが入ってまして、周りを取り囲むように全部で8つのコンテンツがメニューとして並んでいるという。これは

丸にするというのは「全部のコンテンツを見てほしい」というところの現われだと思わなければならない。その中でも特に情報データベースというのが真ん中に置いてありましてここが中心になっているのかなと思います。

会場のスクリーンでは小さくて見にくいんですが、JFSさんが本を出されていて、そのタイトルが「がんばっている日本を世界はまだ知らない」という言葉で書かれていて、これはJFSさんの活動が凝縮されたいいキャッチコピーだと思うんですね。日本人はもともと江戸時代、もっと前から日本人の自然とか森羅万象に対する関係性やつながりのことだったり、環境との関係性においてすばらしい知恵をもっているのにも関わらず、それがほとんど海外に伝わっていない、というのが多田さんとかもう一人の代表の枝廣さんの思いとしてあって、それを言語としては英語にして伝えようとしている。日本の心だったりとか、環境問題に熱心に取り組んでいる企業だっていっぱいありますし、そういういろんな活動を海外とつなぐってところが、これはすごいことだと思います。言ってみれば、環境あるいはサステナビリティという言葉の切り口とした日本というもののデータベース、そういうサイトだなと思います。テーマパークと言ってもいいかもしれません。

これを全部を見ると膨大な時間がかかるのでかいつまんでなんですけれども、せっかくですから英語のページを見ていきたいと思いますが、インフォセンターに入っていくと、こんな風にあるような切り口で検索ができる。これも非常に便利だなと思いますが、当然ながら入ってくる人たちはいろんな目的を持ってここにやってくるわけですから、それに対してすごく広い入り口をつくっているという感じがしました。もちろん全部見ることも出来ますし、カテゴリごとに見ることも出来ますし。ここにプレーヤーごとというのがありますが、これは行政とか？

多田 そうです、行政とかコミュニティとか企業とか。誰が主体になっているかということで、上のカテゴリがテーマ別という、そんな形のマトリックスですね。

上田 あとお聞きしようと思ったんですが、色にそれぞれ大和言葉を当てていますが、これはどんな意味があるんですか。

多田 これはシンボルのロゴマークは今日来てくださっている飯島ツトムさんが作ってくださったんですが、ウェブのデザイナーも飯島さんがご紹介してくださった若いデザイナー二人がつくってくれて、彼らの提案なんですよね。最初上田さんが言ってくださったコンセプトをデザインで封印すると、やっぱり日本らしさみたいな、そういうテイストというかタッチがあったほうがいいということで、それをこういう形で表現したということですので、コンセプトから下りているという感じですね。

上田 ウェブで表現できる色の数ってすごく少ないんですよ。僕ら日本人が感じられる色って、日本人は中間色にもものすごく敏感なセンサーを持っているんですが、ウェブでできるのは200何十色しかないはずで、それからすると、そういう色が実はいっぱいあるんだってことですよね。いろんなインフォメーションがここで読めるわけですね。膨大な情報があるわけなんですけれども、実際にこの情報自体はどのように集めているんですか？

多田　そこは私よりパートナーの枝廣が答えたほうが適切なんですが、彼女が中心になってネットワークでボランティア組織を作っているんですね。300人規模くらいの人っていて、それこそ今日のテーマなんですけれども、実はお互いにまだ会ったことがないとかね、日本だけじゃなくて海外からもボランティアの参加チームがあって、チーム編成をしまして、こういう情報をまず載せたらいいんじゃないかという情報を検索するチームがあって、それを日本語にするチームがいて、英訳するチームがいて、ネイティブチェックするチームがいて、ウェブに載せるチームがいてという、完全にチーム編成というかコミュニティ編成がなされていて、そのサブコミュニティにコミュニティリーダーみたいな人がいて、その人たちがメールベースで普段やりとりをしてきて、最後にコアメンバーがそういうものをチェックしてのせるという、ひとつの流れ作業の仕組みを枝廣がつくったんですね。そういう意味では、表に出ているところもネットなんですが、舞台裏も実はネットで全部回しているというのが大きな特徴かもしれません。

上田　舞台裏はなかなか表からは分からないんですが、JFSさんの最大の特徴というのは実はこの、日本のいい情報を世界に、ということの裏を支えているのがまたネットワーク、しかも人のつながりでやっているということが非常に面白いなと思っております。

後は英語のサイトで日本を紹介しようということで、日本の情報にページを割いていらっしゃって、これは海外から日本を知りたいと思う人がこのページに来れば分かるようになっていたり、なかなか海外に紹介されない江戸のバリューとかですね、そういう論文や著書が読めるようになっていたり、これなんかそうですね、アメリカ人にすれば300年前はなかったわけですから、そのころの歴史のことが読めたりするコーナーがあって。ひとつひとつ紹介すると面白いのですが。もうひとつ面白いと思ったのは、ビジネスセクターというところで企業のトップマネジメントのビジョンあるいは発言を集めていらっしゃって、そういうことが読めたり。

それから、これは日本だけのコンテンツということですが、「JFS持続可能性指標」というのを作られた。これはどういうものですか？

多田　これはですね、話すときとこのセミナー全部使っちゃうくらいなんですが、これは簡単に言っちゃえば2020年とか2030年とか、将来的にどんな日本の形、よく僕言うんですけれども、司馬遼太郎さんが『この国のかたち』という著書を書かれていたと思うんですけれども、要は持続可能性っていったときに日本の形はどんなでしょうと。今僕が思うのは、企業にしてもNGOにしても、局面局面では日本ですごい活動があるんですよ。それを足していったときに、じゃあどんな日本を作りたいんですかという全体のビジョンが見えてないということに僕は非常に問題意識があって、それを誰も作らないんだったら僕らで作っちゃえと。あるべき日本の姿というのを作ってそれをトレースする指標をいくつかピックアップして、世に問うてみましょう、そういうプロジェクトですね。

上田　素晴らしい。海外に情報を発信するということは、海外からも情報を受信してくるわけですね。そのやりとりの中で多分、日本のビジョンというのもブラッシュアップしたり深めていったりするという、そういう仕組みになっているなど見ていて思ったんですけども、これも裏

に基礎データというのがありまして、13 個ぐらいのカテゴリーでこれも非常にいいリンク集になっていて、データへのリンクなんですけれども、一口メモってというのがきちっとついていてすごく使い勝手のいい中身になっています。われわれも本をつくっていきときどきここへ来て見たりしていたんですけれども。

ちょっと駆け足で・・・これもすごく日本人離れした素敵な、いろんな漫画があるんですけど、ちょうどクリスマスなんで、これも子供がサンタクロースにいらなくなった玩具を持って行ってリサイクルしてくださいと頼んでいる漫画で、かわいいのでちょっと紹介します。他にもいっぱいこういうのがあります。あとサイトインデックスというのがきちっとあって、メールニュースで連絡とかですね、きちっとされているというサイトのご紹介でした。

多田 過分の紹介をいただきまして、ありがとうございます。今お互いの視点で見たときにどうかという話をしたんですが、あとは、それぞれの立場から自分たちのNPOの考え方とか、どんなところで悩んでいるかみたいなのところをキーワードを出しながら二人で少し話して、それでこの2部を終わりたいと思います。

枝廣と3年弱、ボランティアとスタッフの仲間とやってきましたけれど、もともとどういう場をデザインするかということに心を砕いていまして、実はJFSを立ち上げる前に3年ぐらい枝廣とこの議論をして、それで作ったという経緯があります。僕は3つキーワードを出しておきました。ひとつは「萃点」(すいてん)ということで、これは多分聞きなれない方がほとんどだと思いますが、英語だとクロスオーバーポイントみたいなイメージで、これは僕が大好きな南方熊楠が、森羅万象すべてつながっているというふうに彼は言っていて、そのつながりのなかでひとつ価値を見出す場が必ずあると、その場のことを彼は南方曼荼羅という曼荼羅概念のなかで萃点と呼んだんです。われわれは僭越ですけども、この複雑な世の中でそういう萃点になればいいね、ということでこの場をデザインしています。

それから、これは私がよく言っているんですけど、人は何でつながるかっていったときに、僕はやはり環境というのはものすごい、所謂コミュニケーションの観点からも資源だと思っているんですね。僕は環境は最大のコミュニケーション資源だという言い方をよくするんですけども、環境というのを無視して生きられる人も生き物もまったくいませんし、環境ということであれば人はすべてつながるだろうなということで、こういうことを言っています。

三上さんの風車話を聞かせていただいて改めて思ったんですけども、今ここにいるわれわれもそうですが、風景というのは結局自然界の上に乗っていますが、ある意味で人がつくってるんだと思うんですね。ウェブというヴァーチャルな場であれ、こういう現実空間であれ、ひとつの風景というのは人が作って、人の手で進化させていく、要するに風景は人の手で変えることができるんだと僕は思っていて、それが社会の進化につながると思うんですけども。キーワードっぽくするならばこの3つを今日は出しておきます。

時間が押しているなので全部は紹介しませんが、今日はコミュニケーションがテーマなんで、組織ザインの話をするのは馴染むかどうかわからないんですが、さっき上田さんと控え室でいろんな話している中で、これはいい悪いではなくて、NGOで割と多いのは、例えば温暖化防止だとか、生物多様性とか、地域の環境保全とか、特定テーマを深掘りする、かなりパーティカルな垂

直型のNPOが多いと思うんですね。それは非常に重要なミッションを背負われているんですが、われわれはどちらかというと水平型で横に広がるオープンプラットフォームの組織になっていまして、それは上田さんのところも私のところもまったく似ていて、コミュニケーション&ラーニングというのがひとつのキーワードだと思うんですが、その辺の親和性があるね、という話を上田さんとしていました。

われわれはグローバルにいろんな情報発信していますから、ネットとかITとかは所与のツールというか、それなしにはわれわれの組織の活動自体が成立しないんですね。イメージ的に言うと、こういうプラットフォームで日本のいろんなプレーヤーをまず横につないで配信すると。そういう形でこちらの方向性があるって、実はねらっているのは逆のこっちの方向性で、フィードバックループをちゃんと回すことで日本の取り組みをさらに加速させましょうということです。現実には海外から今 170 カ国以上にメールニュースを、こつこつと仲間がやってくれたおかげで配信できていまして、国の名前は正直言ってわからないようなところから突然メールが入ったり、今回のエコプロでも海外の方を大分ツアーというかたちであちこちのブースにわれわれがお世話して、英語の通訳をしながら回ったんですけれども、おかげさまでかなりのところまで広がるようになりました。

今、ユビキタス社会とかネットワーク社会とかいいますが、現実には若い世代の携帯電話を見ても、一見つながっているように見えて実は関係性だとか信頼の和が断ち切れているように見えるんで、今日のテーマはそこをどうやったら取り戻せるんだらうなというお話になると思います。われわれのひとつのプラットフォームモデルとしてはこういったイメージで、多様なものとか異質なものがクロスオーバーして、僕は 20 世紀はどちらかというと差異=差を利用して価値を生み出すという価値創出モデルだったと思いますが、21 世紀の価値創出は多様なものとか一見関係のないものをつなぐことで新しい価値を生み出す新しい価値創出のモデルだと信じていまして、これはNGOであれ、ビジネスユニットであれ同じだと思っているんですけれど、そのための皆さんの集いの場になればいいですし、クリエイターたちの止まり木みたいなものにJFSがなれたらいいなと思っています。

上田 2人で3つキーワードを出そうということだったんですけれど、ネットコミュニティをつくっていくための、工夫とか悩みとか夢という一応お題だったので、それに向けて僕なりに考えたのは、「情報発信から情報受信」という言葉。これはこれからネットコミュニティを立ち上げる、または運営していく方でも、「情報発信しなきゃ！」という思いにとらわれている方はものすごく多いと思うんですけれど、情報発信はもちろん重要なんですけど、むしろインターネットの、あるいはネットを使った、ネットだけじゃないですよ、さきほど渋澤さんの言ったつまり「聞く」ということですよ、そっちに重点をおいてコミュニティをデザインするっていうふうにしたときに、がらっと発想は変わると思うんですね。これを僕は最近すごく重要なことだと思っています、これは例えば空間をつくる時も同じですね。例えばこのエコプロダクツ展も情報発信する場だと思ってつくっているのか、ここを情報受信する場だと思ってつくるかによって、全然このイベント自体が変わっていくと思うんですね。例えばそういうことをイメージしたいと思っています。まだ出来ているかどうかはわかりません。

それからあともう1つは「人の息づかい」。やっぱりネットの上ってというのは、どうしても人の

気配ですとか、息づかいというものがなかなか感じられないってところがありまして、それは我々にとってもすごく大きい課題なんですけど、そこをどうしていくかということもすごく重要だと思っんですね。やっぱりそこに「ああ人がいるんだな、誰かが作っているんだな」っていう気配だとか、あるいは「同じサイトを世界中の人たちが見に来ているんだな」っていう、その気配みたいなものが感じられるようなデザインが出来ないかな、ということを考えています。

それからあとは「つながり感」という言葉で表現してみたんですけど、どうしても看板みたいになっちゃうんですよね。さっきのブログは本当にインターネットらしさを非常によく研究されて出てきているツールで、最初からつながり感というのが、例えばトラックバックだとかコメントって機能として入っています。これからはたぶんこうしたツールが主流になっていくと思うんです。インターネットであるっていうことの意味っていうのは、ただホームページを作ればいい、ただ情報発信すればいい、やっていけばいつかつながるとのことじゃなくて、そこにすでにつながり感というのが醸し出されているというのがすごく重要だなんて思っているわけです。

言葉で言ってもよくわからないと思うので、最近僕がものすごく気に入っているウェブサイトをも一つだけ紹介して最後にしたいと思うんですけど、ご存じの方いるかな、「ヒューマンクロック」< <http://www.humanclock.com/> >っていうウェブサイトがあるんですよ。これはですね、アメリカのたぶんワシントンかなんかに住んでいらっしゃるダニエル・クレグさんという、たった一人の人が運営しているサイトなんです。何をしているサイトかという、すごく面白いんですけど、昨日の夜8時23分に、アクセスしたんです、これ。そうすると.....わかります？

デジタル時計なんです。世界中の人が自分でデジカメで撮った時刻を登録すると勝手にウェブサイトに出てくるんです。昨日10分間位見ていたんで、それをお見せしますけど、こんなことやってるわけですね。これはオレゴンの.....ですね、ニューヨークの猫が8時27分を持っていて、これはパリの人が8時28分を登録しているわけです。アナログ時計やってる人がいるんですよ。8時29分、30分、31分ってこうやって、馬鹿ですよ（笑）。8時32分、またこう戻ってきて、これもオレゴンですね。アメリカのサイトなのでどうしてもアメリカ人が多いんですけど、こうやって御夫婦ですかね、オウムが持っていたり。

ずっとね、一日にして1440分あるんで、1440枚が、掛けるもう何倍ももう集まっているんですけど、ランダムに出てくる、あるいは最新のが出てくる仕組みを、ただそれだけの仕組みを作ったんです。これ、インターネットのちょっとシステムのことわかる人はわかると思うのですが、物凄く簡単なシステムで出来ているんですよ。自分の名前と場所とEメールアドレスと写真をアップロードするだけですね、この単純な仕組みなんですけど、これはかなり世界的にも有名な今サイトになっています。これは下は海底20メートルから上は12,276フィートまでとかですね、飛行機の上からとかですね、これは小さな子どもが遊んでいたりとか。

多田 見ていて飽きないですね。

上田 見てて飽きないでしょ。これはオーストラリア。それからこれはパキスタン。それからこれは南極ですよ。それからイタリア。これはブラジルですね。すごく単純なアイデアなんですけど、情報受信型ですね、さっき言ったように。それから、僕なんて言いましたっけ（笑）。

多田 人の息づかい。

上田 あ、そう、人の息づかいをまず感じられますね。自分で書いて忘れてる（笑）。それから人のつながり感という。これがその例えばこのブラジルの時間の4時51分、4時52分はこの国の人が何を持ってくるかわからないわけですね。そうやって世界中の人たちが1つの時間をつくる。すごくいいアイデアだと思う。これが別に環境がどう変わるか、今日言ったサステナビリティにどう繋がるかは、全く関係ないかもしれませんが、でも僕らはこういうプロジェクトをやっていて、ネットを使おうというときに、こういうすごくシンプルなアイデアは勉強になると思ってですね、今日皆さんにご紹介しようと思って。どうですかね、多田さん。

多田 楽しいし、たぶん僕1時間ぐらい見てしまいますね。うん。やっぱり世界で60何億人かの人が生きているんだなというのを、ものすごくリアルに実感出来ますよね。それが簡単に出来ているところが本当に素晴らしいですね。

上田 インターネットの人口は6億人を越えたといわれているんですね。今、人口が増えるよりも早くネット人口が一応増えているのが、僕は救いだと思っているんですけど、ネットはダークサイドもありますけど、こういったポジティブな、面白いものもあるので、ぜひ皆さんも探して、いろんなヒントにしてみたらいいんじゃないかなと思っております。皆さんどうも有り難うございました。

トークセッション

『未来を描くコミュニケーション・プラットフォームの創り方』

飯島 ありがとうございます。なかなかユーモアのあるサイトを見て、和んだところで……。先ほどの「ヒューマンクロック」は面白いなと思っていて、先ほどのフォト日記でここにアクセスすれば、さっきのアクティビティがいつべんに出来ちゃうんですね。お試しくださいます。今日のセッションを聞いて、「ああ、面白かったな」と思ったら、フォト日記、早速応募していただくと。さっきよりももっとイケテル表現で何時何分というのをみんなでアップしたら、この会場の人、来ていただいた方々が連帯するかなと思っています。

昨今のウェブのブームや、それからNGOやNPOが元気なのは、「つながりたい」という感覚で素直にやっているところが、やっぱり伸びている、元気だなと思っているんですね。サイトのデザインにしても、それから先ほど環境 goo 大賞やってきたんですけど、何が分岐点かというのが明解に見えてきたのは、非常に厚化粧的なメイクアップ型で「デザインきれいだね」というところから、「本当につながりたいんだ」とか「あなたのこと知りたいんだ」とか「あなたと話がしたいんだ」ということが明解に出ているのが、大企業、中小企業、NPO、NGO、個人という部門があったんですけども、共通していたといえると思います。実は今年の環境 goo 大賞は中小企業部門が一つも候補なしという、歴史上始めて以来のことが起こったのです。ちょうど中小企業の方々は、大企業の真似をしようと思っているところや、個人のブログによる人の息づかいを感じるものの狭間であって、表現に苦しんだ 2004 年だったのだらうと思います。

だんだん行く年来る年みたいな話になるので、お一人おひとりからお話を聞いていきたいと思っています。活動を通して、今日のテーマでもある「つながる、みつける、育つ」というキーワードがありますけど、もう一度先ほど話し足りなかったことを。例えば、私も青森へ風車を見に行くと、風車を見上げて「めんこいな」という本当に「めんこいな」という感情を持つことが出来ました。普通風車だけ見てニンマリ笑って「めんこいな」なんてこの人おかしいんじゃないかな、という感じがありますが、皆さんぜひ行っていただくと、なぜ「めんこい」という感じが、風車という生き物でないものを見てもわかるかということ、感じていただけるかと思います。環境の話や社会的責任の話は堅くなりがちなんですけども、まず感じてから、ということで三上さん、いいですか？ 風車を見上げて「めんこい」という三上さんからぜひお話を伺いたいです。お願いします。

三上 ちょっとまた宣伝を（笑）。この赤いチラシにりんごのことが書いてあるんですけども、さっき言った市民風車ブランドというのをつくろうということで、毛豆の次にりんごを売ってみようということでやっているんです。今年りんごを売るにあたって、本当の贈答用のりんごというのと、家庭用のりんごと普通言っているりんごをどう売ろうかという話になりました。農家が物を出荷する時にけっこう困るのが、消費者の人が真ん丸で真っ赤なりんごは高く買うけど、ちょっと形が変わっているとか、ちょっと色付きが悪いのを売るのに困るってことがあるんですね。これは消費者の人がある意味で物を買っている人に「そういうもんだ」と教え込まれている、例えば曲がったきゅうりは買わない、でも本当は食べてみると同じ味。りんごというのは

1本の木から贈答用でとれるりんごの個数というのは1割2割しかないんです。残りの分は家庭用みたいな感じになる。我々が先ほど申し上げたように農家の人自立して生活していく、あるいは我々が消費者も含めて農業と一緒に創る、あるいは支えるということから考えると、そういうものをどう売るのがかっていうことが1つ非常に重要なことです。その時に、飯島さんだとか最近お付き合いをしている東京の人たちに、こういう状態なんだけど何かいい名前がないかな、っていうふうに考えて、ついたのが「めんこいりんご」っていう名前だったんですね。いわゆる家庭のものを「めんこいりんご」って名前をつけたんです。後で聞いたら、飯島さんは「三上さんが風車を見てめんこいなって思うのが浮かんだ」というお話をしていたんです。そういうコミュニケーションの中からそういうものが出来たっていうことが私は非常に嬉しかったですけども、我々はこのりんごを、あるいは毛豆っていうものを売る時に、先ほど申し上げた900名の方には、例えばニュースを送る時にこういう情報を紙で送ることによって、一定の情報を流すことが出来るんですけど、やっぱり遠くにいればいるほどなかなか風車を直接見ることは出来ないし、我々が話をすることが出来ないの、なんとかネットでそういうことが出来ないかということを考えておまして。実際我々は1億7800万円お金を集めたって言ったんですけど、県内で鱒ヶ沢町枠、青森県枠と集めた他に、全国枠っていうのがありまして、このお金を集める時にはかなり苦労しました。なるべく私を県外に呼んでいただいて講演するとかお話をさせていただくようなこともしたし、テレビで取り上げてもらったりっていうこともあったんですけど、やはりその時にもっとネットを上手く使えばいいなということを非常に実感しておまして、最近、今言いたいいわゆるコミュニケーションを、飯島さんとこういうふうにやるのと、これをネット上でどうやるのかということに私自身は非常に興味がありまして。おびネットの話とかその辺も興味がありましたし、JFSさんとかThink the Earthさんとかのですね、そういうものを勉強したいということをおまじ申上げておきます。

飯島 津軽弁いいですね、優しくて。もうちょっと裏話を申しますと、このりんごの販売についてもう数日しか時間がなくて、「いい名前がないか」というメールがくるわけですね。メールを出した三上さんの相手というのは、青森の風車に行ったツアーグループで、その中には某広告代理店のマーケティングのプロフェッショナルですとかいっぱいいいたんですね。この話はプロがっていう話じゃなくて、なぜプロが動いたかという話をしたい。それはやっぱりみんな風車を見る、風車を見て感動した実体験なんですね。コミュニケーションをつくるっていう一番最初に大事なことが、先ほど言った「感じている」ということなんです。僕らは普通の話だとかこういう賢いネーミングをつくってこういうふうにやったらってスマートに説明をするけれど、アイデアの原点は「感動」だと思っています。ですからはっきり言って三上さんと一緒に見た、あの寒い風の中で回る風車がアイデアの発想の原点で、そういう実体験があって引き金になってメールが来た時に、みんながバツとそれに応えたと、応えたくないと。それが三上さんの期待に、質問に、真夜中から昼間まで会社の時間を使ってかなりアイデアをもらったりするわけですね、それはJFSでもそうだと思うんですけど、会社の時間を越えてみんながアイデアを持ち寄った。そのプロセスはやはり僕は実体験をしていますし、物凄く感動をしました。嬉しくてアイデアを出していくんですね。片方がアイデアを出すと、ネーミングはこうじゃないか、ああじゃないか、こういう観点もいえるんじゃないか、まさにマーケティングからコンセプトワークから、ものがパパッと決

まっていってしまうということです。駄洒落の部分も含めて、それこそインタラクティブな関係、つまりITだからということじゃなくて、個々の人間がインタラクティブであるということだと思えます。そのために共通体験として、やはり風車を見ようと思えますし、今日たまたま皆さん一緒にいますから、必ず風車を見てください。鱒ヶ沢、三上さんに連絡していただければ見ていただける。人生たぶん変わると思えます。

なんて大袈裟なことを言っていますが、ニコニコしている澁澤さんに森の聞き書きの話をちょっとしていただきたいと思えます。

澁澤 今「つながる」という話をいただいたんで、本当に思いつきで。聞き書きって何がつながっているのかなってことを思ったんですね。ふと思い出したのは、去年の秋口にある神奈川県の小学校の先生が、うちのNPOにお越しになって、ITの話とはちょっとずれるんですけど、父兄参観をしたときに必ずクレームがくる一つの問題があると。それは、給食の時間に先生が「いただきます」といってみんなで食事をする、それを見ると必ず何割かの父兄が学校に翌日苦情がきて、「給食費を払っているのは自分たち父兄なんだから、先生が『いただきます』って言わせるのは何ごとか、っていう苦情がこの頃毎年必ずくるというんです。「それにどう答えたらいいでしょうか」という質問だったんですね。実はその繋がるということなんですが、よく持続可能社会とか、循環型社会っていいですね。何が循環しているかって、けっきょく「いただきます」というのは、人間っていう生き物は何か他の物の命を食べないと生きていけないわけですから、他の生物の命をいただくということに対して「いただきます」です。基本的に循環型社会というのは、物質が循環しているんじゃなくて、命が循環している社会というのをどう実体するか。ようするにどう実感するかっていう部分で、やはり「いただきます」という行為なんだと思うんですね。

それと同じように、例えば高校生たちと森の名人たちとの間っていうのは、先ほどコミュニケーションっていう話がでましたけど、名人たちは、例えば植物の名前をたくさん知っているわけでもなんでもないんですよ。植物の名前なんて全然知らないんですね。これは木だとか草だとかいう。だけどそれぞれの木がどういうふうに見えるのか、これは繊維に見えるのか、この根っこは薬に見えるのか、あるいはどの時期にとると非常に有効に見えるのか。あるいは熊の仕掛けを作る時にどの木は上に使ってどの木は横に使わないと熊は入らないのかとかですね、そういうことは非常に良く知っているわけです。つまりね、自分たちと熊と、あるいはその間に入る自然と草との区別がどこでついているのかが、よくわからないんですね。よくわからないというのは、自分の命の延長に植物の命があって、その向こうに熊の命があるというのを、それを高校生たちが見るんです。

よく僕たちの時代っていうのは学校教育では自然を大切に教わります。自然っていうのは、人間社会の向こう側にあるものですね。それは明らかにヨーロッパ、欧米型の発想なんですけど、日本はもともと自然じゃなくて「自然(じねん)」の世界ですね。自然(じねん)の世界っていうのは「自ずから然り」ということですから、要するに命がずっとつながっているその一部分に自分たちがいるっていうことなんです。ですから、むしろその進歩だとか発展というのが価値観ではなくて、不変であって調和であるというようなことの方が価値観になってくる。つまり、名人たちの生き方っていうのは自分たちの命が相手の命とも繋がっているし、自分の命を支えて

くれる、先ほど「へその緒」という話をしましたが、自分の命を支えてくれる自然にもつながっているし、自然のそのまた向こう側の自然にもつながっている。ある意味では非常にガイア的なんですけど、地球全部が瞬時に繋がっている、繋がっているからみんな「生きている」と言わないんですね。「森に生かされている」という言葉が出てくる。つまりその中で、自分が一部分としてつながることで、自分が生きているという意味がある。自分が生きていないと次が繋がっていかないわけですからね。そういうような概念っていうのを何とか社会の中の価値にしていきたい。

たしかにネットというのは、私はまさにその部分だと思うんですよね。どうやってそのある意味では地球という非常に複雑な「複雑系」を持った一つの生命に、ネットでどう血管で血を流しながら、一つの新しい、全部が繋がっているという概念をつくれるのかと。それがさっき言った、例えば、昔の人は言葉がなかったかも知れない、昔の人なんて言っちゃいけないですね、愛だとか許したとか感謝だとか、これ、今まで宗教用語って言われていたことなんだろうけど、基本的にその部分っていうのが核、そういうものが命の鼓動になって繋がってくるんだと思うんですよ。そんなものを大人たちが、じいちゃんと高校生たちが恥ずかしがらずにしゃべっているところに僕たちが当たるとね、僕たち背広着てこんなことやっている人間たちは、会社にいる時もNPOやるときもですね、朝行って「まず愛について話し合しましょう」なんて話は一回もないわけですよ。経営会議に出てこのプロジェクトは非常に感謝が溢れているかなんて、全然誰もしないわけです。だけどそれが当たり前の価値観につながっていかないと、本当に命が繋がっているということを実感する社会なんて作れないんじゃないかと思うんですね。

その時に私どもはネットっていうのはどういう、さっき「血管」という話をしましたが、どういうものを流していけるのか、その中で「聞く」ということは、命全部を受け止めることですよ。つなぐことと受け止めること。その両方の行為ということがとっても重要になってくるんだろうな。またこれからそれを社会にどう価値づけていくかっていうことが、聞き書きっていうこと自体をずっと続けていくモチベーションにつながっていくのかなっていう感じがします。

飯島 ありがとうございます。僕も毎日愛を語りたと思っています。続いて多田さんですが、一緒に青森に行きました。青森に行った多田さんは少年のように風車を見て喜び、森を見て喜び、白神にも行ったんですけどね、多田さんのそういうところはもちろん普段お付き合いしてよくわかるんですけど、ああいう回路に入るとですね、自然の回路に入るとよりお茶目さが出て良かったなと思っていて。日頃ある意味で堅いといわれる環境の話をしていて、今の渋澤さんのお話のように、自分の境目がとれていくっていう感覚と、そういうことをこれからネットや仕組みや活動で展開していくと思うんですけど、多田さん、先ほど言い忘れていたことがいくつかあると思うので、補足してちょっと。

多田 飯島さんが最初に「命の潮流に戻って行くんだ」ということだとか、50年エンパワメントの話がされていて、そこを足掛かりにいるんな人の話を聞いていて、、やっぱり上田さんのサイト面白かったですね。あれがなんで面白くなっている理由を僕なりに考えてたんですよ。3つぐらい思ったのは、あれって結局スナップショットの羅列なんだけれど、それがありとあらゆる世界から届くっていう、堅い話をしちゃうと、持続可能性の中で「多様性」という概

念があるじゃないですか。多様性が価値だみたいなことを言われるんですけど、それってなかなか概念的に理解出来ないですよ。でも、ああいう絵のシリーズを見せられると、それが瞬時にわかるっていう、多様性がそこにあるぞっていうことと。そこに時計、何時何分っていう時間が貼り付いているという、「時の流れ」が感じられるということと。あれってみんないい顔していますよね。猫までいい顔しているなと思って、「生きているぞ」っていう叫び、命の叫びみたいなね。その3点セットがあるんで、素晴らしいのかなと思っていました。

だからああいう本当に舞台裏自体は単純なあれを回しているだけだと思うんですけど、ああいう仕掛けを今後JFSのネットでもなんか上手く仕掛けて、ワクワク感とかより楽しさみたいなことを仕掛ければ、裾野が広がるかなということをつらつら考えていました。

飯島 そうですね。頬がゆるんでいる多田さんの顔を見てもホッとしますが、実は私も車のデザインのコンセプトをやったりするときに、ゴールが普通は造形がきれいだとかウェブのデザインでもウェブがきれいだっていうふうに考えていくんですけど、実は一つ物指しがありまして、「ココ(頬)がゆるむ」っていうのが一つの物指しなんです。デザインとか言葉を通して、それから体験プログラムを通して、三上さんは今度は新しいりんご、りんごを一つ齧ったときに頬がゆるむ、ココが本物へのアプローチじゃないかなと。長らくデザイン教育や私たちの教育の中で何かたくさん知識を知っていることが目標だったり、たくさん持つことが目標だったりしてますが、ここにいる一人ひとりの方々が、皆さんが頬をゆるますっていうことをゴールにご自身の仕事を考えてくれたら、少し世界は変わっていくんじゃないかなというふうに思います。

先ほどの上田さんが紹介してくれたサイトはまさにユーモアやつながりや一人ひとりの鼓動が生き生きと描かれている。あれを見るとなんとかふわんとした気持ちになったり、三上さんの言葉を聞いてもふわんとした気持ちになる。やっぱり頬がゆるむような仕事っていう目標を。または自分が学校で勉強していることも、勉強していることが本当に人の頬をゆるませることにつながっていくのだからと日々考えることによって、だいぶデザインも、それから皆さんの仕事も豊かなものになっていくんじゃないかなと思います。

すごく素敵なサイトを紹介してくれた上田さん、日々考えていることをもうちょっと。考えないでやっているんですけど。また裏話をしますと、最近ちょっと体を壊しまして、日々大変な多くの仕事をされているんですけど、今みたいな人を和ませるっていうところで、そういうところに上田さんの心のメーターはふれていると思うんですけど、どうでしょう。

上田 そうですね、さっきのサイトは皆さんうけてくれて嬉しかったです。あれね、ぜひ見てほしいんですけど飽きないんですよ。画像を小さくして、自分のデスクトップの好きなところに置いておくような機能もついていて、けっこう心配りが出来ている。最近アップロードされた写真を順番に見るっていうのもあるし、全部からランダムに表示するとかいろんな、最近「ヒューマンカレンダー」っていうのを始めたらいい。なんか盛り上がっているんですけど。

あれはちょっとユーモアがあって面白かったんですけど、他にも例えば、地球上に東経何度、北緯何度何分っていうのがあるじゃないですか。それを1分までかな、やるとですね、間が何キロか離れたグリッドの、ちょうど緯度経度が整数で終わるところに立って写真をアップするっていうプロジェクトもあるんですよ。全世界のリアルな地図をつくっちゃおうっていう。面白いんで

すよ。砂漠地帯は全部同じ風景だから色はみんな一緒なんですね。たぶん日本でやるとけっこう多分緑が多いね、やっぱり森の国ですからね。そういう写真が並んだり、都市部はもう少し灰色な感じになったりとか、すごく面白いことをやっている人たちがいっぱいいるんですよ。

僕は今日多田さんと2人で話をしている、1つJFSとの共通点というのは、Think the Earthもそうなんですけど、日英のバイリンガルで頑張ってる。JFSさんはそれが一番重要なポイントだと思うんですけど、僕らも頑張っているんですけど、ネットの良さっていうのは、同じ思いを持った人が、地域とか関係なく全世界探し当てることができる。気づいた人がアクセスしてくれる。さっきはカメルーンから来たなんていう話もありましたけど、繋がることのできるわけですね。しかもそれが瞬時に繋がると。しかも個人個人が繋がる。「私は企業でございます」といって来る人は1人もいなくて、どこそこの誰だれです、というところから必ず来るわけで、個人が繋がるんですね。実際にThink the Earthもそうやって、メールを送って来てくれたことでいろんなことが始まったりとか、っていうことがやっぱり起きているんですね。その可能性が全世界に広がっていくということが、僕はやっててすごく刺激があります。

それとさっきの多様性の話と差異の話。わかんないけどこれまでの人類はなんとなく「あいつと違う」っていうことがすごく大事というようなことだったと思うんですけど、それも大事かもしれないですけども、むしろ同じっていうところが、ぜんぜん肌の色が違う、年齢が違う、性別が違う、もしかしたら種別が違うと、いうところでも同じ何かを共有することが出来るっていうことを広げていくことが出来る、発見していくことが出来る。インターネットって、ほとんど先進国ばかりなんですよ、つながっているのが。今、6億人になりましたけど、これからアフリカとか南米とか、いっぱいつながってくると思うんですよ。今、とりあえずツールは英語で、共通言語として英語をとりあえず使うことになるかもしれないし。さっきのサイトで一つ面白いのは、ノンバーバルなんですよ。言葉を使わずに、何か共感が起きているという。そういうこともできるんです。それを何かもうちょっと僕らも意識的に、インターネットみたいなものとか、つながるといふことについてもう少し深めて考えてみたいと思います。

飯島 ありがとうございます。ノンバーバルというのは、言葉を使わないコミュニケーションのことですが、私たちは日頃は言葉を交わしながらも、相手の表情、色、着ているものとか、風景、そういうものから刺激を受けながらコミュニケーションしている存在なんですけれども、このへんに大きなヒントがあるかもしれません。JFSのサイトに色の展開をしたのは、JFSのコンセプトは、「日本の文化、日本の環境情報を世界に発信する」。それだったら色も輸出しちゃおうよ、と。日本の色を言えば、向こうはこの色は何色？と返ってくるわけですね。

それから多田さんもある環境誌に書いていた着物の話ですが、我々日本人が着物を着て海外に行ったときにももちろん「ファンタスティックな着物」と言われるんですが、「その色何ですか？」と聞かれるんです。そこである意味、双方向性が起こってくる。で、ノンバーバルなコミュニケーションもヒントだと思います。先ほどの話につなげるならば、頬がゆるむコミュニケーションになると思います。

続けて最後、時間があと20分ほどですので、将来の話をご皆さんにさせていただきたいと思えます。これから何をしてみたいのか、こうあったらいいなとか、未来へ向けてお一人おひとりから

話を聞きたいなと思います。明日からどうするか、でも構いませんし、2005年こんなふうになったらいいな、というところもあると思います。お一人お一人の言葉を聞きたいと思います。

三上　　ちょっと「育つ」と言う話をしてみたいと思います。

我々が風車を建てたのは、私の中ではやっぱり地域を変えたいとか、地域を自立させたいと言う気持ちがすごく強かったんですね。もちろん風車の建設も、これからもしていくんですけど。やはり重要なのは、地域の人たちの気持ちが変わっていく、ということだと思っています。

毛豆をつくっている木村才樹さんの話をしたいんですけど、木村才樹さんというのは自分の土地を40町歩耕作をしています。普通の専業農家で2、3町歩ですので、40町歩というのはかなりの規模です。その方は同時に有限会社をつくってまして、100町歩耕作しています。その方が我々の毛豆を耕作した面積は、7反歩、0.7町歩です。200分の1くらいしか耕作をしていなかったけれども、今年やっている中で一番気になったのが毛豆の畑だと。

なぜかという、食べる人の顔が大分見えてきた、ということです。普通、農家の方が何かを生産している時というのは、相手の顔、消費者の顔が全然見えないんですね。それがだいぶ見えてきたので、これは失敗したくないと。他で作っている品目っていうのは失敗した時はしょうがない、天候次第だというのがありますが、これは絶対失敗したくないと。そういうふうには生産者と消費者との顔が見えることによって、多分、食べるほうも美味しく食べられるし、作るほうも非常にやりがいがあって作られるということがあります。たとえば、彼は銀座に9月十五夜の夜、「風丸の集い」に私と一緒に来たんですけど、その時は東京の方々も集まってくれて、非常に銀座の人気者になって、「才樹さん、あなた銀座に来たらバッチリよ」と言われて、本人その気になって「そうかな」とすごく喜んだんですが、すごく磨かれて変わって行くという、成長するのが良く分かるんです。

彼が言っていることで我々に非常に響く言葉っていうのがありまして。彼は有限会社をやっているんですけど、青森県内で、我々が県から仕事をもらって、有休農地をテーマにワークショップをやった時、みなさんがいる前で、「我々の会社は、実はNPOみたいなものなんです。三上さんに騙されて、実はもうこんなことをしてるんです」みたいに。喜んで騙されてるということなんですけれども。そういうふうにして、非常に消費者の方々との関係、あるいは飯島さんとか、我々とつきあうことによって色々な人と知り合いになって、たとえば自分の農業経営をどうしていこうかと考えるようになるんですね。

地域のコミュニティというところでもおもしろい変化が出てきていると思うんですが、最近、町役場の農林課の職員の方が三上さんに是非会いたいと言うので、この間会って話したんです。その時何を言ったかという、「風丸」っていう、毛豆につけた名前が非常に売れてきまして、役場の職員の方が、「三上さん、風丸と言う名前を使って、鱈ヶ沢のみなさんにいろんなもの、毛豆を生産させたり、加工品をつくりたい」と、「風丸という名前を使わせてください」と言ってきたんですね。それで私は「それは駄目です」と。

木村才樹さんが我々と毛豆を作ると言った時に、リスクを取って下さいと言ったんですね。我々ももちろん迷惑をかけるつもりは全くないんですけども、仮に天候が悪くて全く採れない、あるいはいっぱい採れたけれど全く売れないという可能性があって、その時、100%こっちが責任持つと、相手は責任持たなくなるじゃないですか。だからリスクをちゃんとシェアしましょうと。

彼はそれを約束してくれました。周りの農家の人はそういうことをしてくれますかと聞いたら、「そういう人はいません、でも自分は面白いからやります」と言ってくれたんですね。

ここから先が多分、私は問題だと思っているんですけど、町役場の職員の方がそう言うてくるのは非常におもしろい取り組みだし、これを使って何とか町を活性化させようというんですね。そこまではいいんだけど、結局、名前を使ってぺたぺたシールを貼って、なんか売れるように思うところに、ちょっと問題があるってことなんですね。それを「一緒に作っていこう」ということを我々は言いたいんです。

ですからたとえば、木村才樹さんのところで生産の管理をきちんとやる、たとえば農薬をこういうふうにかける、出荷のときはこういうルールでやりますと。いうことをやったら、当然それは我々も一生懸命売りましょうと。加工品つくるときも、毛豆を使った加工品をどんどんつくってください、で我々が評価をしてキッチンとしたものであれば、市民風車ブランドとして取り扱って売っていきましょうと。そのことが信頼をつくるということを皆さんわかってください、と。

非常に残念なことに、農家だけでなく、いろいろな業界や企業も、行政とか今までのやり方とかそういうものに頼りきって生産活動や地域活動をしているところが多くて、それを変えるためには、今言ったような、我々が消費者や市民という立場で生産者の方とおつきあいをしていく。そのことによって皆さんの気持ちを変えて、一緒に農業をつくる、そういうことがこれからできそうだと、というか、そういう流れができて非常に嬉しいと思っています。

飯島 ありがとうございます。本当に嬉しそうですね。農業、農作物を作るって言いますが、少しパラダイムが変わってきたと思います。「信頼」という言葉がありました。お互いの中に信頼をつくるために、農作物を作ったり、農作物を売るためのコミュニティをつくらうという発想です。これは私たちが頭の中にすりこまれている、農業の人は農作物をつくってる、みんな当たり前前に思いますよね、学校でもそう教えられている。そういうふう思い込んでいるんですね。

農業をつくる、「百姓」という言葉がありますが、『百の姓』と書きます。百の才能があるという意味です。百の仕事ができないと農業ができない、というのと同じです。マルチタレントということですね、マルチジョブともいう。それぐらい農業というのは可能性があった産業であり仕事だったんですけども、さきほど言った指導により、あなたたちは土地を耕して農作物を作っていれば良いというふうな、誰も言わなかったんですけど、思い込みで、私たちも多分まだ思っていると思うんですね。そういうパラダイムが少し変わろうとしています。

私たちの一つ一つの仕事が、何のために仕事をしているか。信頼を作るために仕事をしているんだというふうな、ポジションを変えることによって、皆さんがやっている仕事、授業もそうですね。学校に行ったら先生からの話を聞くために授業に行くのではなく、先生との信頼を築くために行く、おそろしい生徒ですね。そうなっていくと、学校も変わるということです。私たちは信頼をお互いに担保しあう社会にはいつてきたと思うんです。

それまでは日本はお互いの信頼を担保するために、国家に頼ったり企業に頼ったりしていました。まさにこれからは信頼をお互いに作り上げていくという関係を、お互いにどういうふうな再構成していくかという時代に入ってきたと思います。続けて洪澤さん、お願いします。

波澤 今のお話の続きになるんですが、聞き書きの高校生たちが終わって次どうしようか、と言ったときに、そういえば自分のじいちゃんの話をもとに聞いたこと無いな、って話になるわけです。自分の両親の話もほんとに聞いたこと無いな。聞き書きをサポートしてくれる役所の人間や私たちNPOや企業の人たちが、高校生たちと一緒に自由に話し合うフォックスファイアー（狐火）倶楽部というのをつくって、飯島さんたちに一生懸命応援してもらっているんですけど。その場でみんな企業の間がいうのは、みんな自分のカミさんの話を聞き書きしたことは無いな、って必ず出てくるわけです。飯島さんもおっしゃったように、今まで夫婦という形でいかにもそこでコミュニケーション、信頼ができてるんだって思っていた時代ってのは、多分もう終わってくるんだらうなと。

聞き書きをやっていて高校生たちが変わってくるという話を今日はずっとしてたんですが、一番変わっていくのは、森の名人たちなんですよ。今でいうまさにお百姓さんたちなんですね。彼らは森の中で自分の衣食住全部賄うことができると言っていましたよね。とっても安心して生きています。ただ、ひとつには、彼らはお金にはならないのです。どんな炭焼きの名人でも、どんなマタギの名人であっても、いまの社会ではお金の評価されない。農業と百姓の違いというのはお金というものを介在しての概念ですよ。

彼らは、時代から遅れたもの、このまま自分は認められずに社会から死んでいくもの、自分の子供たちは一生懸命、農業をやっていてもお金を得ようとする農業をやるわけです。それから当然、全然違う職場についたりしている。そういう時、私これをやっていてつくづく思ったのは、人間が一番寂しいもの、悲しいものというのは、自分の存在を社会の誰にも見られずに、そして自分はこの社会に必要なと思って死んでいくということなんだと非常に痛切に思いました。その時に、自分を見てきて、目を輝かしてくれて、「名人ですね」と言ってくれる高校生が自分の前に突然現われる。それがどんなに生きることを勇気づけるか。

生きることを勇気づけることは、「本当にあなたを見てるよ」「あなたを意識してるよ」ということ。これは、地球の裏からでもできることですよ。それをお互いが言い合うことが、人間が生きることで一番ハッピーなことなんだと、聞き書きを通じて本当に痛切に思ったんですよ。高校生たちはまた次の代の高校生たちとつながっていきます。そして、高校生たちと名人たちの枠の外に私たち企業やNPOの人間たちがつながっていきます。それはね、つながっていくことは基本的に「お互い生きてるね」「それを僕は見てるよ」ということのネットワークがつながっていくことだと思うんです。

今まだ200人、今年で300人の高校生たち、名人たち、あわせて600人ですけど、これが、毎年200人、高校生100人、名人100人ずつ増えていく。その人たちが自分の両親や自分の奥さんの聞き書きを始めてくれる。そして自分のじいちゃんばあちゃんたちの話を聞いてくれる。お互い、生きてるよ、生きてるよ、生きてるよネットワークが広がっていく。そうするとさきほど僕が言ったような「感謝」だとか「愛」だとか、普通まともに話せるような、要するに照れでなくて表で普通に話せるような社会に多分なってくるんだらうな、と。そうしないと多分、環境問題とか持続可能な社会は絶対築けないんだらうなという感じは思っています。

飯島 ありがとうございます。人は、つながりあってこそやっぱり人として自分を自覚できるんだな、ということなんですね。話はちょっと飛びますが、僕はニューメキシコ州のペトリ

ファイド・フォレストというところがあるんですね。日本語訳すると「石化された森」というところなんですけれど。水平線のかなたには石、大きな木が、一回古代の森が倒れて、水が入って水没した木の中にミネラル、つまり川の水の石の成分が入って、それが全部つまりめのうの木が水平線の向こうまで続いている。もちろん国立公園になっているんですけども、その中で一匹のトカゲに会ったんですね。そのトカゲが「やあ」というのですよ。ちょっと変な話ですが。そのぐらいに命と命は呼応しあう。日本に帰ってきてこの話をすると、「トカゲと話したなんてまた飯島さんまた変なこと言っている」というふうに言われるかもしれませんが、事実、私たちの命と向き合ったときに必ずそこに何かの「双方向性」があるということなのです。

私たちはコミュニケーションをしないと生きていけない動物だと言うこともよく分かります。それから、「おまえもそうなのか」という感覚があります。そういった感覚を持ったのが、先ほどちょっと多田さんから出た話なのですが、南方熊楠という方だと思います。これも話をすると2週間くらいぶっ通しで話さないと駄目な話ですけど。命を巡って対話をしていくと、お互いの命の存在として対話をしていくという時代になってきているのかなと思います。今の洪澤さんのお話から伺えました。では続けて多田さん。

多田 持続可能な社会の話が今日何回か出てますが、飯島さんと最近、「ただ持続するだけの社会って面白くも何ともないし、つまらないね。何が持続すればいいの？」という話をしています。さっき上田さんがちょっと紹介してくれた持続可能性指標は実はそういうところも狙っていてね。「持続するって何？ どういう物差しで測ったらいいの？ という、社会がいい方に向かっているか悪い方に行っているかの簡単な物差しを作って、日本がどういう方向に行っているかを測ってみましょうよ」というプロジェクトです。これはある時期が来たらオープンにしますが、こちらで一方的に決めちゃうと言うよりも、ある種の参加型のプロジェクトにデザインしていきたいなと思って仲間と一緒に進めています。

それからこれは、日本の地域やコミュニティが市町村合併の問題などがあってかなり大変な時代になってきていますよね。2年半のJFSの活動を振り返ると、Think the Earthさんもそうなのですが、企業とのパートナーシップは非常に厚くて、かなり企業といろいろ連携しながらやってきているのですけれど、まだ地域や自治体とのパートナーシップ作りは全然できていなくて。実はその辺のところを三上さんと何かできないかみたいな話もしています。青森がマイブームになりつつあるんですけど。持続可能な青森という観点で言うと、この間三上さんから聞いてややショックだったのは、わらの話を三上さんがしてくださって。稲を刈り取った後のわら、自然循環の観点から言えば土に鍬込んでしまって土の分解で自然に土に返すのがいいらしいのですが、青森では冬が早く来るといふ事情があって自然分解するサイクルに乗らないらしいのです。そうすると鍬込むことができないので燃やしている。燃やすとやはりにおいの問題だとかもちろんCO₂を排出するだとかで、非常に困っていらっしゃるといふ話を聞いて。僕は、すぐそのソリューションがあるというわけじゃ無いのですが、こういった問題というのは、農家だとかそういうところだけで考えるっているより多分、いろんなNPOだとか企業だとか、それこそ多様性ですよ、多様なグループが参加する中でこういうもの一つとってもソリューションがでてくるというふうに思っていて。いま、市町村でも環境に熱心なところは、例えばISO14001とか環境マネジメントシステムを作ったりとかしてるんですけど。具体的に持続可能なまちづく

りを市民参加型でやっているところというのは、無いとは言いませんけど非常に希有ですよ。こういう言い方は失礼かもしれないけど、多分そういうことをする人材とかノウハウとかソフト的な技術が無いのだと思うんです。何かそういうところで、今後、JFSとは限らないけれどもNGOとのパートナーシップみたいなこともデザインできればいいかなという気がしています。

もう一つ。こないだこれも飯島さんと一緒だったんですが、ある建設メーカーさんのステークホルダーダイアログを半日くらいやったのです。その中で一つ思ったのが、環境報告書。非常に環境にいい建物を彼らなりに苦労して造っていて、あちこちで環境に配慮した建物のスナップショットを、環境報告書にババーッと「どうです！」みたいな感じで出ているのですが、全然おもしろくないのです。何でおもしろくないのかなと思って、いろいろ話していく中で、「いやこれは実は、施主からあまり環境にお金かけちゃいけないというなかで、いろいろ環境にデザインしておいた方が10年20年のスパンでいいですよ」という説得をしたりとか、あるいは、かなり大規模なものを作るのでコミュニティの人たちと非常に苦労しながら話をして説得していったりとか、そういう話を聞かせてくれて。僕が思ったのは、「何でそれを書かないのか」と。言いたいのは、プロセスの方ができあがったものよりもおもしろいのです、遙かに。僕はやっぱりプロセスを可視化するようなことも、これからウェブだとかコミュニケーションの中でやっていきたいし、プロセスの中にこそヒントがあるんじゃないかという気がしています。

それから、さっき洪澤さんの話を伺って刺激を受けたのですが、上田さんも同じことを言っていましたけれども、発信と言うことに我々目線が行きがちですが、受信する力というものを非常に感じました。これは全然持続可能性とは関係ないのですが、非常に会社のパフォーマンスがいい企業の方とこの間ある場所で話をして。その会社は、非常におもしろいんですが、マネジメント研修の中に「傾聴」というプログラムを入れているらしいんです。傾聴って耳を傾ける。だいたいもうその世代というのは自分の価値観に凝り固まっていて耳を傾けない。権力も持っていますから、人の話を聞かずに押しつぶす。そういう人たちに対して、いかに人の声を聞いてやっていくことが大事か、かなりきちんとしたプログラムをやっていて、「価値観が変わる」というんですよ。これは持続可能性とは関係ないんですが、今日非常にインサイトフルだったのは、受信するとか、聞く力の大切さみたいなこと、そこをウェブの中でデザインすることの大切さを私自身は一つ大きな学びとして経験させて頂きました。

飯島 最後時間がオーバーしそうですけれども、上田さんお願いします。

上田 今日ここに集まって話して頂いた方々というのは日々すごいアイデアが生まれていて、すごくおもしろい活動をどんどん思いつかれて実践していて、しかも皆さん楽しそうに生き生きとした目をされていると。これはすごく大事なことじゃないかと、今日何となく思っています。最近、日本は閉塞感があるのではないかと、先行きがどうもとか、子供たちにも未来がどうのこうのとか、どうもマスメディアとか見ているとそういう話題が多いと思うのですけれど、僕はこういう大人や、洪澤さんのところで変わって、目を輝かせるようになった子供たちがいっぱいいると思うんですよ。むしろそういう人たちに僕たちはもっともっと注目をして光を当てて、Think the Earthでも紹介していきたいし、自分たちもそういうことをちゃんと自信を持ってできるように、そしてまた、そういうひとたちとの信頼関係も作っていったり、一緒に協働しながら

ら何かを作っていたりとかしたい。

失敗してもいいので、失敗体験をいろいろ重ねていくとか。失敗しながらへらへら笑っていたいというのがあるんですね。ホントにいい失敗というのは学びがものすごく多いので。さっきも「育つ」という話がありましたけれども、育ったなって思うっていうのは大抵、成功しているときに感じるのではなく、いっぱい失敗をしたときとか、いい失敗をしたときに次どうしようかと考えている自分が、そこに成長っていうのがあると思います。失敗がいろいろな意味で許される場作りということも重要だし、ネットはそういう意味では素晴らしい。試行錯誤をしていい、スクラップ・アンド・ビルドがいくらでもできちゃう。僕は昔テレビ番組を作っていましたけれども、これはできてしまったものを二度と変えられない。それからイベントだと2週間くらいあれば最後は少しずつなら改良していけるけれども、いずれ終わってしまう。でもネットの上のことならいくらでも、「この間考えていたこと、考えが変わったんだ」ともいえますし。いろいろな意味で試行錯誤できる場というのがネットの場でもある。そういうことも重要だなと思います。そういう意味では僕らもいろいろ失敗を重ねていきたいなと思います。未来に向けてのいい失敗を。

あとは、なかなかつながれないところとつながっていききたいなという気持ちがありますね。共感する人たちとつながることというのはできてきていると思うのですが。例えば、以前、セバスチャン・サルガドという写真家が、難民の人たちを撮った写真展を東京でやっていました。そのときに、彼は子供のポートレート写真をいっぱい撮っていて、最後にばーっとならんでいたんですね。その子たちがものすごい目をしてカメラに向いている。透明な、というか澄んだ、ものすごく力のある目で。サルガドはその目を見て子どもたちの写真を撮り始めたのですが、サルガドのコメントが今でも印象深いのですが、「子供たちは、『僕はここにいる』ということをお伝えしようとしている」というんです。誰も見てくれないわけです。でもそこにサルガドという写真家が来て写真を撮る。ということは、その写真を全世界の人が見る可能性があるわけで、そこに向かって、もしかしたら明日死んでしまう子供たちかもしれないけれども、世界に向かって何かを見る、ということを通じて、「僕はここにいるんだよ」と言っている。そこに対して何かできないか、というのが究極的にはやってみたいことです。そういうなかなかつながれないところ、そこを忘れずにいくというのがすごく大事なことかなと思っています。

飯島 目を見合うということは日本の言葉で、「まぐあう」という言い方をします。「まぐあい」は目を見合うということと、もちろん男と女が抱き合うということも「まぐあい」というのですが、そこにやはりお互いの存在、命の存在というものをただ感じ合う、という社会、日本の文化がありました。

だんだん話がいいところに来ていますが、毎回時間がないということで、本当はあと3時間ぐらい欲しいのですが、もちろん男と女が抱き合うということも「まぐあい」というのですが、そこにやはりお互いの存在、命の存在というものをただ感じ合う、という社会、日本の文化がありました。

「双方好」よろしくお願ひします。

=End=